

歴史には、神話という心実が不可欠である

永安 幸正

目次

- (一) 人類史では、物語が出来事を作り出す
- (二) 神話は民族の集合無意識の表れ
- (三) 日本・大和国家の建国神話
- (四) 神話は、善生産の原型物語
- (五) まつりごとの真の姿と作用
- (六) 郷土と祖國の神話からプラス発想を学ぶ
- (七) 本物の神話は、国民の靈力を自覚させ永遠のいのちへと導く

(一) 人類史では、物語が出来事を作り出す

これまで人類は、長い歴史において、さまざまに「出来事」(events)に出会ってきた。その出来事の中

には、旱魃、水害、疫病、地震、火山爆発のように自然界が引き金を引いて起きるものもあるが、それを受け、「人類にとつての災害」という出来事に作成して来たのは人類自身である。例えばそのような地震多発地帯からこぞつて避難し移住するという出来事も、あるいは強力な耐震構造の文明を構築するようになるという出来事も、祟りを危惧して行われたとも噂される平城京から平安京への遷都なども、人類の対応の仕方であり人類が作る出来事である。そしてその背後に物語が存在するのである。

一、物語の役割——人類は、いろいろな「物語」からなる世界観、歴史観、思想を生み出してきた。例えば、

①少し宗教的に響くが、地震は「徳の尽きた支配者に対する天の警告である」。

②他愛ない物語であるがそれは「地下のナマズの蠢動である」。

③科学的にいえば、それは地殻プレートの衝突により起こされる。

同じ出来事にいろいろ異なる物語が適用される。そして、人類の歴史では、出来事の積重ねがそうした物語を作るといふより、宗教的等の、さまざまな天才（カリスマ）から与えられた物語が、さまざまな出来事を生み出して来た、という側面が強いのではないだろうか。

出来事と物語とのこの作用関連は、個人の歴史である人生においても、例えば国家のような集団の歴史においても存在する。

二、物語の産出者——その物語の最も古く最も強力な生産者・創造者は世界宗教であったといえよう。

それが近代になると、科学が徐々にそれまでの宗教にとって代わり、合理的な物語の産出者となるが、宗教と見まがうイデオロギーが依然、物語の大シナリオとなり得る。そして、集団においては、建国の神話という形で国民神話・民族神話が重大な作用を演じて来ているのであり、人類の世界史は、異なる神話を掲げる異民族の戦いと興亡の歴史であるときえ解釈できよう。

古代の例を挙げると、『旧約聖書』の創世記が現われなければ、ユダヤ教も、キリスト教も、イスラム教も生まれなかつたし、十字軍も行われなかつたし、世界史は大いに違ったコースを通つたことであろう。孔子により儒教がまとめられるということがなかつたならば、東アジアの歴史の様相はかなり違つたものとなつたであろう。

三、物語を構成する元型的要素——しかも、興味深いことに、そういう物語には、物語の全体を構成する共通の部品要素というものが見出されるのではないか。よく言われるように、シェークスピアの作品には、その悲劇と喜劇を作り上げるうえで、いくつかの決まったタイプの人間関係・心理的要素が存在する。親と子の間の憎しみと殺し、それと知らない兄弟姉妹同士の実らない恋愛などがある。それはギリシヤ悲劇にもあるし、世界中の物語には共通の元型要素——カール・ユング的——が幾つか使われる。

四、物語を成り立たせる陰陽の価値要素——物語の要素は、理想（反理想）とする価値の面、及びそれを獲得する手段方法の面から浮かび上がる。

①彼岸の個人目的——救い（罪、墮落）、極楽・天国（地獄）、永遠の生命（輪廻転生の苦）
 ②此岸の個人目的——自己実現（自己抑圧）、安心（不安）、喜び（苦惱）、健康（病氣）、長寿（短命）、子孫繁栄（子孫断絶）
 ③此岸の集団目的——平和（争い）、正義（不義／不正）、豊かさ（貧窮）、和合（いじめ）、愛（憎）、慈悲（利己）、仁（不仁）、信頼（裏切り）、礼節（失礼）、知恵（愚かさ）

このような価値要素群が、個人的、集団的に、目的として求められる。すべての物語には、プラスの価値群とともに、（-）に示したマイナス価値がそれぞれに付き物であり、物語全体にはそれらを避けたいという気持ちが織り込まれる。

五、天地人一体の宇宙論・神仏論——これは「天地の恵みに信頼して行動する」というように、貧困に苦しんだ古代には結構意識されていた価値であるが、現代でも天地自然つまり現代で言えば自然界と人類との関係を調和させるといふ価値が重視されて来ている。その理由は人類が科学技術を開発し、地球環境を悪化させて来た事であり、天地自然との調和、言い換えると「天道に従う」という、古代に当然と見なされた価値が新たに復活して来たのである。

現代この側面で、人類の心をやつと復活して来たのがこの物語である。古代東アジアの『易経』『礼記』などの物語では「天地人及び道」という世界観がすべての思想、倫理、道徳の基本に存在し、天地宇宙そのものが一切の創造の根源であり創造者とされる。「誠は天の道なり、それを誠にするは人の道

なり」などと言われる。

『旧約聖書』のように宇宙創造神を戴く世界宗教では、神と宇宙と、地球人類社会に、神の働きが徹底するものと一貫して理解する。

この天地人論と神宇宙人類論との両者は、人類の有する最大かつ包括的な物語である。

六、天命論・運命論——人間には個人でも集団でも、どうにも左右できない出来事が降りかかる。思うように行くと理解される出来事もある。そこで、善悪相即であり陰陽一体である価値観に人間の運命を結び付ける物語を、古今東西、人類は必ず求めてきた。民族の興亡、国家の栄枯盛衰、創業と守成、個人の運命などは、物語として逸することができないテーマである。

こういう天命論・運命論は、天地人の宇宙論の中において、時間の流れと結び付けて個人と集団の変動を位置付ける物語である。就中、彼岸と此岸にわたる魂の輪廻変転、過去と現世と来世の三世に亘る人間の運命という課題は、古くから洋の東西に現れ、人々の心から消えたことはない。この人間の運命は、世界各国で国家のために戦死し犠牲とならねばならぬ兵士の安心立命に深いかかわりがあり、戦争を含む国家行動のエネルギーを左右する。

七、個人の自己実現と個人間の共生——古くからの物語の最も重要な要素は、目的の物語であって、それは各個人の自己実現と各人の間でのその共存とである。古来、異なる文化で理想とする価値を選び出してみると、個人については「自己実現」（安心立命）が共通の目的とされ、同時に、一つの社会とし

てはそういう個人の自己実現の「共存」を目的とする。平和とか、統合とか、団結、公正、秩序というのは、その共存が実現した状態である。

次には、そこに至る方法物語であり、これには二種類存在する。一つは「個人の心の内部の自己実現」の方法であり、個人の範囲で、自己を対象にして行われるものである。心を清浄にするとか、祕い清め、プラス思考など、要するに自己自身を対象とする方法であり、喜びと安心立命への物語である。

それと同時に、もう一つは、人間はいくら個人で自分を対象にするとはいえ、そこに必ず「他人との共存の関係」が作用するから、人間関係の側面を考慮せざるを得ない。古来から推薦されてきた仁、愛、慈悲、慈愛、寛大、寛容、正義（義）、礼節、叡智、信、誠が存在し、それに現代では自由（自律）、無危害などの「間柄の原理」がそれに当たるといえる。

また、自己実現でも、間柄関係でも、自然界、物質界とのかわりが作用するから、この要因も考慮せざるを得ない。物語は、天地人のうち自然界の側面を取り込むものである。「お爺さんは山に芝刈りに、お婆さんは川に洗濯に」、「桃がどんぶりこ、どんぶりこ」という物語は優しい山里の郷土（自然、風土）を前提にしているのである。

八、因果律思考——このような物語は、できるだけ因果律思考に基づいて構成されることを人類は求め

て来た。出来事を原因と結果との関係として理解するというのは、なにも現代の科学時代だけの特徴ではない。古代から人々は出来事を理解するとき、常にその原因は何かを探求して来た。先に触れた三世の因果律もそうであるし、「一切は神仏の思し召しであり、有難いことである」という一種の悟りも同様である。

人類のあらゆる物語では、共通に陽たる善を願い、陰たる悪を避け、善を獲得する筋立てになっている。物語ではすべて、人間が陽の側面を実現するために陰の側面をどのようにして乗り越えるかに苦心する、という構成になっている。その善を獲得する行為を支えるのが「因果律」の物語であり、「こうすればこうなる」という見通しと確信を与える。

九、因果律を超越する物語——しかし、人類には、どうしても因果律の超越という境地が必要である。突き詰めて行けば、そもそも原因と結果との関連が確認できない出来事もあるし、原因と結果の関連が確認できたとしても、最早、出来事の結果を左右出来ないという事もある。自分がなぜ癌に罹ったかということ、遺伝とか喫煙、アスベストなど、おおよその原因を突き止めることはできよう。しかし突き止めても自分しか感じない癌の激しい痛みは、軽くはならない。

出来事の個々の因果律は明らかにならなくとも、あるいは問題とせず、出来事そのものを受け止め、明日に向けて問題の解決に努め、あるいは出来事を受容を行って、先に進むという物語も在り得る。人類の物語の舞台に「今を超える」超越の物語が最後に現れるゆえんである。『旧約聖書』にある「ヨブ記」はそれを教えるためのものではないか。

いずれにしても、人類社会では、このような物語を人類が保有するということが、歴史の出来事を見出してきたのではないだろうか。出来事が物語を作ってきたというより、歴史の始めから、生来与えられてきた物語とその要素が、出来事を、そして歴史を生み出してきたのではないだろうか。

以上のように、人は物語によって動くといえるが、しかしそれには色々な階層があり、また様々な領域が存在する。すべてに共通する根本は、人間の究極欲求である「救いの物語」である。あらゆる宗教の役目は、この救いの物語を持ちたい、「どうすれば救われるか」という人間の間に答えることである。この物語が多くの人々の心を捉えようと、家族、地域社会、いろいろな組織、国家までを動かす力になる。日本で織田信長の時代にそうであったように、浄土真宗による念佛信仰が盛んとなれば、武家の権力に反抗して自分たち信徒の信仰を活かす信仰社会を建設しようとする運動が高まる。

ユダヤ教、キリスト教、あるいはイスラム教信仰は、それぞれの救いの道にふさわしい国家社会を樹立し、国家と宗教とを合一させようとする。その信仰が現実の毎日の生活のなかにタブーを多く持ち込むものであればあるだけ、そういう宗教と国家の合一による、人々の生活に対する規制は強くなる。今日のイスラムは特にそれが強い。

これら三つの宗教には、共通の基本類型が存在し、人類の心に対する恐らくもっとも深い作用力を秘めていると思われる。それは次の物語を持つ。

- ① 人類も含めたこの宇宙を無から創造された神という万能至高の存在がおられる。
- ② 人類はその神により万物の霊長として創造され、地上のすべての被造物——物質と生物——の長として振る舞う任務がある。神から、「生み増え大地に満つ」という弥栄を約束される。
- ③ しかし、初代の人間（アダムとイヴ）は罪を犯した。神が食べてはいけないとされたリンゴの実を取って食べたことである。それ以後、人間は楽園を追放され、額に汗して労働することなしに生きて行くことはできなくなった。神の心に背くことを「原罪」と呼ぶが、このままでは人間は救われないで、天国でなく地獄に行くことになる。
- ④ ところが、神の遣わされた神の独り子・イエスが十字架にかかって死なれた。各人は、また各民族は、その神の意図を信じる者、すなわちその人間の原罪を贖うためにそうされたのである、ということを感じるならば、その原罪は立ち所に救われる。
- ⑤ 人間は、その後の人生を、神の御心に沿って送るならば、その人は死後天国にゆき、永遠の生命を頂くことになる。
- ⑥ 神の命じられた生き方とは、イエスの教える「隣人愛」の実行である。
「あなたがたは、律法を完成し、自分が神から愛されたように、あなたの隣人を愛しなさい。」

こういう物語が、西洋社会では、古代ローマ帝国時代のカトリック及び東方正教の社会を作り上げてきた。その間、七世紀にモハメッドが現われ、唯一の神の「最後の預言」を伝え、イスラム教の世界を生み出した。新たな物語への書き換えである。結果、一面でこのことはユダヤ教・キリスト教の世界との間に、十

字軍に象徴されるような、古代中世における厳しい帝国主義抗争をもたらした。その後の世界史は、この三つの世界宗教が動かしているといっても過言ではないであろう。

近代になると、マックス・ウェーバーが明らかにしようとしたごとく、プロテスタントの信仰というものは、人々の救いへの止み難い願望と経済生活との間に、まったく意図しない結びつきを生み、救われるためには欲望を抑えて清浄な禁欲生活に打ち込み、禁欲するために、ひたすら自分の労働に対して合理的に工夫をこらし、精進すべし、という信仰生活を勧める。「祈りかつ働く」という生活態度を社会に生み出し、それが新たな国家社会を創造させる。腐敗し墮落した旧社会から独立した新大陸のアメリカ合衆国はその産物であった、と。

ここでは、個人の救済神話とそれを達成する国家の建国神話とが、見事に結合される。アメリカ人とアメリカ国家とを理解するには、『独立宣言』『フランクリン自叙伝』を併せて調べるとよいであろう。

因みに、東アジアの大陸では、紀元前、孔子（前五五一―前四七九）により、古代儒教が体系化され、儒教文化圏が成立し、そこではもう一つの「救い物語」が生み出された。それは天地人の物語であり、天道すなわち天地の道に順う順天の生き方が人道すなわち人の道であり、子孫繁栄という現世での救いをもたらすと教えた。

その基本は五倫つまり君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友という人間関係において、五常つまり仁・義・礼・智・信という倫理道德を実行すること、そしてこの五常の徳を体得する「聖人」を中心として国家・世界を

形成するところに在るというのである。

他方、南アジア、インド亜大陸では、ヒンドゥー教が長い間かかって悟りの宗教を培養し、その中から特に釈迦という人物が悟りと救いに到達する道を示した。それは一切が四苦八苦であるこの世から脱却するため、八つの聖なる道を教える。それは人間の五感を清浄にし、自我を取ることににより欲望を制し、中道をとし、慈悲の行を実行することであるとした。この物語を実現しようとして古代にアショーク王は一つの国家を作ったのであった。しかし、故郷のインドでは仏教は滅び、周辺の東南アジア、東アジアのみに普及している。

我々日本も、古くから、このような救済物語と建国神話とを有するのであり、それは八世紀の『古事記』『日本書紀』に物語られているのである。

現代の人類は、個人主義と自由主義が結合した救済物語を共有し、それに民主主義という国家社会神話を結び付けて、神話物語の世界に生きているといえよう。

(二) 神話は民族の集合無意識の表れ

さて、古代中東の民の膨大な記録である『旧約聖書』の中に、創世記がある。これは人類の共有財産の一つであるが、その初めに出てくる神による「創造」では、人間も含めて宇宙天地一切を「父なる神」――

エホバまたはヤーヴェ、アウス、GODなどと呼ばれる存在——が実質たったの六日間で、「無から創造」(ex nihilo creatio)を為した、と語られる。

どのくらい古い伝承の記録かは詳らかにしないけれども、いわゆる創世記によれば、神は六日かかって、天地と生き物と人類とを創造された。

英語では creature (クリーチャー、被造物、生き物)と呼ばれるが、これは神により神の心を込めて創造されたものの意であり、神の創造された物質も生命もすべて creatureなのである。

創世記の物語を、日本の先人が苦勞して美しい日本語に移された「文語訳聖書」から引いて参照したい。〔聖書〕近代日本の代表的な文語訳聖書、日本聖書協会発行、一九七四、一一二ページ、改行、ルビ追加〕私は、この「文語」は、近代日本人が創造した最も美しい日本語であると思う。仏典も、漢籍も、記紀も、そしてコーランも、このような美しい現代日本語に移して習うとよいだろう。

元始に神 天地を創造たまへり

地は定形なく 曠空くして 黒淵の面にあり。神の靈 水の面を覆たりき。

神、光りあれと言たまひければ 光ありき。

神、光を善と見たまへり。

神、光と暗とを分ちたまへり。

神、光を晝と名け 暗を夜と名けたまへり 夕あり朝ありき 是首の日なり……。

神、言給けるは 我佩に像て我佩の像の如くに我佩人を造り 之に海の魚と天空の鳥と家畜と全地に匂ふ所の諸の昆蟲を治めんと、神其像の如くに人を造りたまへり。即ち神の像の如くに之を創り之を男と女に創造給へり……。

神、彼等を祝し彼等に言ひけるは 生めよ繁殖よ地に満盈てよ 又海の魚と天空の鳥と地に動く所の諸の生物を治めよ、之を服従せよ……。

第七日に 神、其造りたる工を竣たまへり。即ち其造りたる工を竣て七日に安息たまへり……。(ルビ、句読点追加)

後に見るように、日本の古典である記紀では、神と呼ばれる存在は唯一の神ではなく、複数の神々であった、こうした唯一神でなく、しかも宇宙の外にある神ではない。天地を創造する唯一の存在とはされていないのである。究極の神、宇宙を創造する神、というものが居られるのか否かは、杳として、語られない。

古代に人々がどのように問いを立て、探求したか——いかなる物語を作ったか——は、その地域の後の文化の特性を規定したといえるのではないか。

なぜ神が父なのか、母なる神ではないのか、母系でなく父系であるのかは、日本神話と対比せられる。また、なぜ唯一なのか。こうした問いはさておくとしても、この創世記は、人類史上、一番包括的で雄大な物語の一つである。むろん、人類であってその神の創造を見たものは誰一人としていないから、事実として本当かどうかは確かめようがない。しかし、それを「信じる」ところから、合わせて世界最多の信者数、聖典の民を誇る三大世界宗教——ユダヤ教、キリスト教、イスラム教——が出来上がっている。歴史において、「信仰の測知れない力」を見落としてはならない。

この創世記については、それが「事実」であるかどうかの議論よりも、ユダヤ、イスラエル、アラブの民がそう信じて来た、思ってきた、という「心実」を確かめるべきであろう。

しかも、その信仰・心実から、後に人類史の数多くの偉大な出来事——プラスとマイナスの——が生まれたということもまた、確認できる真実なのである。少数でなく多数の人々が心に思うこと自体が、歴史を實現する要素であるとともに、思われた心実は、さらに新たに現実を造り出し、心実は事実と化するのである。

アメリカ合衆国の首都・ワシントンDC——ディストリクト・オブ・コロンビア——では、四月に訪問す

ると、ポトマック河畔の桜が実に美しい。その桜は昔、日本から贈られたものというが、嬉しい限りである。と、ポトマック河畔の桜が実に美しい。その桜は昔、日本から贈られたものというが、嬉しい限りである。

その桜の花霞みの中に、アメリカという国家を象徴する記念建築が集中している。初代大統領ジョージ・ワシントンを記念する高いモニュメント、そして奴隷解放のリーダーであると信じられ——誤解されているエイブラハム・リンカーンの記念館も建っている。

実は、南北戦争は奴隷解放が主目的ではなかったのである。リンカーンが奴隷解放のリーダーであったというのには、そのままに完璧な真実なのではない。リンカーンが北軍の長として南北戦争を戦ったのは、「南と北の統一された連邦制」を守りたかつたからであり、必ずしも奴隷解放を行いたかつたからではない。

リンカーンが奴隷解放を真剣に考えたというのは事実でないが、リンカーンにそういう奴隷解放の旗手というイメージ、すなわち神話を重ね合わせることで、その後のアメリカ国民にとって重要な政治的、文化的意味を秘めてきたのである。

リンカーンは実際、このように述べている。

「私は連邦を救いたいです。憲法の下、一番の近道で救いたいです。……」

この闘争に際し、私の崇高な目的は連邦を救うことであって、奴隷制度を救うことでもなければ、あるいはこれを破壊することでもありません。……

私が奴隷制度を何とかしたい、有色人種を何とかしたいと思えますのは、それが連邦を救う道だと信じているが故なのです。」

(カール・サンドバーク著、坂下昇訳『エブラハム・リンカーン』Ⅱ、新潮社、一九八〇―九九ページ、ルビ追加、訳文若干修正。)

奴隷解放の物語は、アメリカ合衆国がイギリス帝国から独立し、連邦として維持されるという現実が成り立ってのち、第二神話として十九世紀の舞台に出現する。しかも、それは「神によって人間が平等に造られた」という始源の建国第一神話の中から掘り起こされたものであった。

人類の歴史は物語と一体であり、神話と無縁ではあり得ないものである。民族や国家、あるいは諸々の宗派の人々は、集団の心理として、神話を生み出すことを欲するものである。「共同物語」として、しばしば「共同心実」、「共同幻想」として、そうなのである。それは全く正常な心理であろう。あらゆる民族が、起源神話や祖先神話、宗教なら開祖神話を持つのは、そのためであろう。

ところが、「不合理なる故に信する」ということの苦手な現代の日本人は、多く「神話」というものに大いなる誤解を懐いているようだ。つまり、神話について、「事実か否か」という議論をするのである。

アメリカの建国神話とはどんなものか。それは『独立宣言』（一七七六年七月四日）に謳われているが、『独立宣言』では、造物主（創造神、GOD）が、各人を自由かつ平等な存在としてお造りになられた、という神話が基礎となっている。この神話の物語がアメリカ国民を形成させることになった。独立宣言の「神話」は次のようにいう。

われわれは、自明の真理として、すべての人は平等に造られ、造物主によって、一定の尊厳がたい天賦の権利を付与され、そのなかに生命、自由および幸福の追求の含まれることを信ずる。

また、これらの権利を確保するために人類の間に政府が組織されたこと、そしてその正当な権力は被治者の同意に由来するものであることを信ずる。

（高木八尺ほか『人権宣言集』岩波文庫、一一四ページ。ゴチ、ルビ追加。造物主とは、唯一の神GODである。博愛の項なし。）

まさに「近代国家」の建国宣言、つまり詔、勅語に、千八百年昔の「聖書」における創造主の「神話」が、信すべきものとして引用されているのである。

このアメリカの宣言は、わずか二五〇年前、一七七六年のもので、歴史のより古い旧世界の他の国の宣言に比べると新しい、だから神話ではない、と考える人もいよう。しかし、やはりこれは立派な神話なのであって、人間とその価値が唯一万能の神に由来すること、その人間が自ら国家と政府を構築する、という信仰（心実）を謳い上げる神話に他ならない。

これが、神話でなくして何であろうか。古代のではないが、近代の建国神話そのものであり、建国さ

れた国は「神の国」——宇宙と人間を創造された神の意志が貫き神の愛に包まれた国——であるということ
を表明するものなのである。アメリカ合衆国は立派な「神の国」なのである。

後述するが、アメリカの占領当局によって日本に強制された天皇の「人間宣言」に現れた神否定あるいは
神分離の思想と比較してお考えあれ。(後編の資料「天皇人間宣言」参照)

しかし、このアメリカ独立宣言の背後には、十七世紀以来行われた欧州から米大陸への民族の大量移動
と原住民への支配という事実があった。数は少ないが原住民——インディアン——として人間が住んで
いた土地に、欧州白人が後から侵略して植民し、先住民を排斥して新たに国を造ったという事実である。これ
は、いかなれば北米大陸における「天孫移住」(天孫降臨)か。いや、「人口帝国主義」というべきものであ
った。

インディアンというのは、インドの人々と誤って称されたもので、今日ではアメリカン・ネイティブと呼
ぶ。

この事実を見ないで、独立宣言の文面だけを読み、人間の自由と平等を謳う「美しき理想」として歓迎す
るならば、地上の歴史の事実を無視した空想物語を宣言することになるのである。

翻つて、日本列島上でも、「日本書紀」という国家の正史には、正直に、南のクマソ、北のエミシへと及
ぶ、征服物語、統合物語が記述されていることを忘れてはなるまい。綺麗事のみでなく、「あるがままに」
というのが記紀編纂の心であつたが、それはそれを読むわれわれの態度でもなければなるまい。

こう考えながら、ワシントンDCに行くのである。そこには、先にも触れた如く、アメリカ合衆国の建国
神話を作り、その建国を行った主役たちが祀られている。ワシントン(一七三二―一九九)、ジェファソン
(一七四三―一八二六)、さらにリンカーン(一八〇九―一八六五)、今日では、ケネディ(一九一七―一九六三)
等々も。

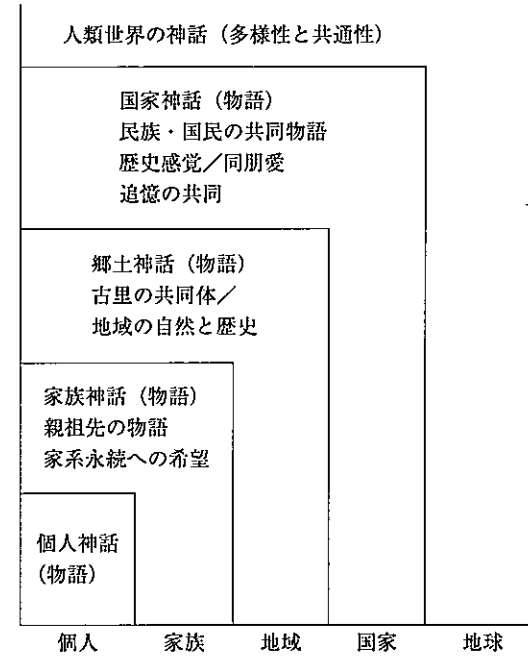
二十世紀の社会主義諸国では、思想上、科学の立場を掲げるから、神話などもつてのほかである筈だが、
革命党の指導者やその後の指導者についての個人崇拜神話のオンパレードである。ただ、自然なものでない
から、その人気はしばしば短命に終わっている。レーニン(一八七〇―一九二四)、スターリン(一八七九
―一九五三)、毛沢東(一八九三―一九七六)、金日成(一九一二―一九四)、ホーチミン(一八九〇―一九六
九——この人は寿命が長い)等々である……。

神話には、もちろん悪しき神話も少なくない。一九三〇年代に猛威を振るったナチス・ドイツの「アーリ
ア民族優越神話」の例がそれである。むしろ二十世紀以前は、各国家とも、悪しき神話が主流であつた。

古代の神話体系には、自己を正常なものとし、他を異邦人と呼んでけなすような人間観が数多い。これも
要注意の代物である。

古代アジア大陸の漢民族が周辺民族を南蛮、北狄、東夷、西戎などと名づけたのもそれである。これに
習って、日本の大和民族にもそれはあつた。

神話の段階と成り立ち
——継承と創造——



今日まで通じるあらゆる学問の見
通し図を立てた大学者、古代ギリシ
アのアリストテレスなども、ギリシ
ア以外の他民族を蔑視する風があつ
た。先にみた『旧約聖書』にも民
(民族)の差別意識は色濃い。(古代
大陸の中華思想については、森嶋通
夫『日本にできることは何か』岩波
書店、を参照。)

また、古代から今日まで、宗教は
歴史を左右する強力な動因であるが、
その宗教神話のうちにも好ましくな
い要因が混濁する。玉石をよくよく
吟味し選り分けなければならぬ。

神話は心実であって、人類の歴史
において必要不可欠の妙薬であるが、
読む者によっては、毒薬にも麻薬に

も化ける。

二十世紀の後半には、「脱イデオロギー」ということが盛んに唱えられたものだが、「脱神話」は不可能である。現代の人間観では、神話(物語)のことを考えないわけにはいかない。唯一神(唯一仏)教の下では、神仏の働きが一切、個人、家族、郷土、国家、人類社会を貫いているから、個人の物語と世界の物語とが分裂することはない。しかし、そういう宗教を取らない人々においては、確実な拠り所は目先の自己利益である。かくて現実社会は、利己的個人の集まりとなり、政治の宗教も自己利益の間の自由競争をいかにして共存させるかに、眼目がおかれることになる。神話物語は、個人の自己実現の物語だけでよいことにならぬ。同朋への奉仕など、国家への無用の犠牲であるという思想が流行する時代となる。

従来のような排他的一神教でない物語はないものか。その種の宗教類型に物語を吸収する以外に、人類に選択可能な道はないのか。これが二十一世紀人類の最大の課題ではないか。自由主義とは、表面的にはそういう統一の物語を拒否するところに成り立つ原理であるが、人類の心が欲する物語はともそれだけでは済まされないようにも思える。どうであろうか。古い型の一神教的物語は、ユダヤ・キリスト教とイスラム教との文明的・文化的抗争を引き起こすであろう。人類にはもう一段、物語改革が必要なかも知れない。

(三) 日本・大和國家の建國神話

われわれ日本民族は、『古事記』と『日本書紀』に、肇國(國を肇める)神話つまり國家開闢、建國の神

話を持っている。この神話が出来てからはじめて、日本民族、日本国民というものが本格的、自覚的に、形成され始めたといつてよい。民族は、神話を共有することによって民族となり国民となるのである。

日本の建国神話は、『古事記』と『日本書紀』との間で、神々の名称などかなり異なるが、『古事記』によると次のようである。

①「天地初めて発けし時、高天原に成りし神の名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神。この三柱の神は、みな独神と成りまして、身を隠したまひき。」

(次に、次にと、神々が成りまして……最後に)

「次に伊邪那岐神、次に伊邪那美神。」

②「ここに天つ神諸の命もちて——お命じになられて——伊邪那岐神、伊邪那美神、二柱の神に「この漂える国を修め理り固め成せ」と詔り、「二柱の神の働きによりて島、成る」

「これ游能基呂島なり。」

(この後、二柱の神、淡路、隠岐、四国、九州はじめ、大八州を生み、さらに次々と草々、穀物が生まれ、神々・人々が生まれる。)

(以上、次田真幸『古事記』全体訳注、講談社学術文庫、上、三二六、四〇ページ、ルビ、句読点追加)

この物語は、先に掲げた『聖書』の「創世記」のような、神による全くの無からの天地創造ではなく、天地は既に存在し、その上で神々の出現——神々が創造せられたのでなく、姿を現された——国家の土台としての国土の「生成」の物語であって、その後の生成発展の段階のみが語られている。

日本の神話は、自然界の国土、人間、動物、植物の生成を語り、国家・国土という単位での秩序の生成を述べ、さらに国家統治者・天皇と朝廷の正統な系列の出自を物語る。これは見事な歴史の体系である。

なお、『日本書紀』は『易経』の「太極分かれて陰陽となる」という思想に立つが、『古事記』はそうではないようだ。ほぼ同時期に成立した二つの古典の根本世界観に、かくも大きな相違があるとは、不思議ではないか。文言の相違は今はいま。詳しくは、神野志隆光『古事記と日本書紀』講談社現代新書、参照。

日本の神話は、「宇宙も人も無から神が造られた」という創造神話ではない。ユダヤ・キリスト教、イスラム教流の無からの創造ではないのである。ここに、日本の神話の特性がある。この事実を正しくふまえないければ、「神の国」や「現人神」に関して、本質を理解出来ないまま、つまらない論議に惑わされることになる。重々、配慮したい。

さて、この岐と美の二柱の神は結婚されて、物産みの働きを行われ、まず大八州国が生まれる。ところが、伊邪那美命は亡くなられ黄泉の国に去って行かれる。それを追いかけて行って、身が汚れた伊邪那岐命は身を清める禊を行われる。すると、さまざまなものが産まれ、最後に天照大御神、月讀命、そして

建速須佐之男命が産まれる。

③「ここに左の御目を洗ひたまふ時成りし神の名は天照大御神、次に右の御目を洗ひたまふ時成りし神の名は月読命、次に御鼻を洗ひたまふ時成りし神の名は、建速須佐之男命」

(次田『古事記』上、九八ページ)

これは『古事記』の表わし方であるが、『日本書紀』では素戔嗚命と、漢字が異なっている。(坂本太郎ほか校注『日本書紀』岩波文庫(一)四八ページ。)

ところが、須佐之男命は、高天原で暴虐の限りを尽くして、天照大御神の「天之岩戸隠」を引き起こし、そのため神々の合議によって葦原之中津国へと追放され、その地を開拓する。その地とは、出雲地方ということであるが、その子孫が大国主命である。

『古事記』と『日本書紀』とでは記述の文言が若干異なるが、『古事記』の語るところを見れば、天照大神との誓——神前での占いの勝負——の後、須佐之男は勝ちに乗じて、すさまじい乱行を働かれるのである。

④ここに須佐之男命……

天照大神の宮田の畦を離ち、その溝を埋め、またその大嘗聞こしめす殿(建物)に屎まり散らしき。

天照大神、忌服屋に座して、神御衣織らしめたまひし時、(須佐之男命)その服屋の頂を穿ち、天の斑馬を逆剃ぎにはぎて墜し入る時、天の服織女見驚きて、梭に陰上(女性器)を衝きて死にき。

〔古事記〕次田真幸全訳注、講談社学術文庫、上、八六―八七ページ、ルビ追加。また、『日本書紀』にも、本文と一書第一、第二、及び第三に、ほぼ似た記述が見える。『日本書紀』宇治谷孟全現代訳、講談社学術文庫、四〇ページ以下、ルビ追加。)

肝心なことは、天照大神が須佐之男命の乱暴に出合つて「見畏みて」岩戸に籠もられたという記述についての解釈である。

「見畏みて」とは、普通は、恐れて、怒って、難を逃れるために、というように解釈されているが、もつと掘り下げて考えれば、深い意味のあることが分かるのではないか。

ここには、天照大神が、恐れてとか、怒ってではなく、次のような高い徳性を実行し表された、という重大な真実が物語られているのではないか。

大神は命の乱暴狼藉に対し、寛大な心で、それを自己の不徳として受け止め、一時乱暴から避難され、之岩戸に籠もられた。

歴史には、神話という心実が不可欠である

右の記述には、次のように注目のすべき天照大神の寛大な心事が描かれていることを見逃してはならない。

⑤ かれ、然すれども、天照大神はとがめず告りたまはく、「尿如すは、酔ひて吐き散らすところ、我が汝弟の命かくしつらめ、また田の畦を離ち溝埋むるは、地を惜しとこそ、我が汝弟の命かくしつらめ」と詔り直したまへども、なほその悪き態やまずてうたてありき。

(須佐之男命がそのような乱暴をはたらかれるのに、天照大神はそれをお咎めにならずに、「尿を撒き散らされるのは、弟の命が酒に酔っておられるからであらう、また田の畦を壊されるのは、畦の部分の土地が惜しく、そこを平にして稲を植えたいと思われるからでしょう」と、理解のある言葉を述べられた。——永安訳。次田『古事記』上、八七ページも参照。)

このあと岩戸籠りとなるのである。古典の記述には、この箇所から、不思議なことが続く。記述は天照大神の岩戸隠れに移るのであるが、なぜこのような相手を許す、愛す、という天照大神の「寛大な心事」が描かれているのか、皆さんは不思議と思われないだろうか。

スサノオの乱行を述べた後、すぐに天照大神がそれを畏怖して岩戸に身を隠す、と古典は書いてはいないのである。つまり、見畏みという言葉が出てくるのだが、その意味の取り方が重大な点となる。(孔子『論語』の「君子に三畏あり。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。」李氏第十六頁八、岩波文庫版、二三〇頁。)

その時「見畏みて」とある。おそらく、次のように心の中で思われたのであろう。

私がこのような乱暴狼藉に出会うということは、何か私に不徳の致す所があるのでしよう。この体験を深く感謝して受け止め、自分の心を清めます。そして、どうか、須佐之男命が罪を償い、改心し、更生していくように祈ります。

そこで、八百万の神々は、天安河原に集い、大神の御出ましを願う。天照大神は、神々の願いに応じて、岩戸から再び御出ましになられる。人相がとても美しく円満となられ、心の進化が表れておられた。

これは、古代人の高い精神の物語である。その精神とは、慈悲、寛大、自己反省の精神にほかならない。

このような解釈は、古典の記述の読み込み過ぎであらうか。学界では少数派であるようだが、神宮皇学館の教員でもあった法学博士、廣池千九郎(一八六六—一九三八)によるものであって、大正年間から昭和初めにかけての解釈である。それは、江戸時代の井上正鉄翁(一七九〇—一八四九)の説にヒントを得たものともいわれる。

日本の『記紀』に記された神話、特に「岩戸籠もり」の記述のこのような解釈については、廣池千九郎『道徳科学の論文』第七項「天照大神の天岩籠もりの原因・状況及びその結果」という箇所を参照されたい(⑥、二九一頁以下)。岩戸籠もりは「天照大神の御恐怖もしくは御憤怒に出するもの」ではないこと、大神

の寛大な精神と自己反省の結果であること、その結果として「大神御修徳の完成」を見られたこと、という一九三〇年代における廣池博士の解釈が述べられている。

西方の歴史で見ると、古代ローマ帝国下におけるイエスの十字架事件をどのように解釈するかは、解釈する人の無意識の中に存する原神話が彼の宗教としての「三位一体」の顕在的神話を生み、偉大な作用を人類の世界史に及ぼしたのではないであろうか。

もちろん、「岩戸隠れ」を、アマテラスが「死去」して天に昇られたことを表すものだとか、日食現象だとか、あるいは氏族の間の大争乱による政治的断絶である、など様々に解釈する立場はある（倉野憲司校注『古事記』岩波文庫、二六六ページ）。

神話物語では真実と心実が重なり合って、深い教訓となる。

少数派の説でも、やがて重大な心実を現すものとなることは、歴史上、決して珍しくない。かのイエスによる律法解釈にもそのことが示されている。

モーゼが述べた「目には目を、歯には歯を」（有限の報復に止めよう）という正義の律法について、イエスは「汝の敵を愛せよ」という意味を込め、「報復の正義」から許しと「愛の正義」へと、正義の内実を飛躍させた。それが「律法を完成するために、私は来た」（『聖書』）ということの真意であった。そしてイエスは少数派として、迫害されたのであった。

『日本書紀』によると、やがて、天照大神は、「豊葦原瑞穂之中津国は自分の子孫が治めるべき土地である」という「神勅」を宣言して、幾度か子孫と他の神々を遣わし、国津神たちと交渉させるが、うまくはかどらなかつたという。しかし、遂に、姉・天照大神に対し、弟・須佐之男命の子孫である大國主命は、すすんでこれを受け入れ、自分たちが開拓した中津国を「天孫族」に譲る。

そこで、天津国から天津日子番能邇邇藝命が多くの供を連れて、草木豊かに茂る中津国にそびえる日向の高千穂へと天降り（あまり）された。これが古典の物語る天孫降臨の次第である。

その後、九州日向から、子孫の神倭伊波禮毘古命が、天下を治めるのに一層好適な地を求めて瀬戸内海を通じて東に移動し、大阪湾から直接上陸しようとして果せず、紀伊半島を回って東側から宇陀の谷を越えて大和の地に入る。そこで即位し、詔を述べる。初代天皇たる神武天皇である。これが神武東征であり大和（日本）の建国の物語である。

『古事記』には載っていないが、国家の正史である『日本書紀』には、神武天皇の発せられた詔として、次のように述べてある。平易な現代訳で記そう。

東征をはじめから六年が経った。天津神の御陰によって凶徒は平定され、内州の地は騒ぐ者がいなくなり、民の心は素直である。大人（聖人）が制（のり）を立てれば道理が正しく行われるが、治める業が民の利益となるならば、聖人の行う業と理解して間違いない。

私は謹んで尊い位につき、人民を安んずることに努める。われらに国をお授けになった天津神の御徳

歴史には、神話という心実が不可欠である

に^{こた}、皇^{こう}孫^{そん}の正義をお育てになつたお心をこの国に^{ひら}弘^{ひろ}めよう。国中を一つにして都を開き、天下を掩^{おほ}（おお）いて一つの家となすこと（八^は紘^{こう}一^{いつ}宇^う）は、この上なく善いことである。

（宇治谷孟『日本書紀』全現代語訳、講談社学術文庫、による。上巻、一〇七―九ページから、抜粋・編集し、一部表現を変更、ルビ等を追加。）

これはまさしく東アジア大陸古代の遺^いされた「聖人の治」の教えそのものではないか。日本固有、日本独自のというより、普遍的な政治哲学である。

東アジア大陸、中国（シナ大陸、China）古代には、「王者は民心をもつて天となす」（『史記』）という格言があるが、神武天皇の詔は、リンカーンの「人民による、人民のための、人民の」（by the people, for the people, of the people）政治における「人民のための」に当たる基準を述べるものといえよう。

ただし、『日本書紀』においては、神武天皇は、この詔の後に、アマテラスオオミカミでもなく、アメノミナカヌシでもなく、タカミムスビノカミを祭祀なされる。これは不思議ではないか。『日本書紀』の哲学は、アメノミナカヌシを中心とする『古事記』のそれとは違ふのだろうか。記紀の間のこうした差異は何を物語るものなのか——閑話休題。

以上は、日本国を造つた大和民族の伝承であり神話であるが、一方、お隣の朝鮮（チョソン）民族も、「檀君神話」を高く掲げて民族の誇りとし、学校教育のための国定教科書に大々的に取り入れている。韓国

では、檀君神話を教育上極めて重視するようになり、「五千年の歴史」を有する古朝鮮が存在したと力説するのである。

建国神話ともなれば、政治権力の行方とかかわるので、どうしても自民族、自国民の優越性を誇張する傾向が強くなるが、それが「ナショナリズム」というものであって、各国は、それくらいまでは、心実として、お互い認め合つてもよいのではないだろうか。

（四）神話は、善生産の原型物語

すべての神話には——古代かその後かを問わず——二つの面がある。いのちにとって役立つ、善の生産・功の面と、善の破壊・罪の面とである。いのちの働きの二面を表わす物語である。一つひとつのいのちの善を高め増やすというプラスの面とともに、その裏に不可欠の側面、罪と罰の考え方があり、それは集団のいのちを左右するマイナスの面である。罪とは、集団から見たいのちの秩序の破壊であるが、罪の種類分けを調べるにより、そこにどのような「いのちの秩序観」が秘められているかが分かる。

天津罪と国津罪とについて、それぞれの内容の比較は、『延喜式』の大祓の祝詞に記されている。それによると、次の対比がある。

一、天津罪——須佐之男命が天照大神に対して行った罪行為であつて、天津国の神々による罪の行為と

言う意味になったもの

畦放（あはなち） 田の畦を壊すこと
 溝埋（みぞうめ） 灌漑水路を壊すこと
 樋放（ひはなち） 灌漑の樋を壊すこと
 類蒔（しきまき） 他人の耕地に稗とか雑草などの種を蒔くこと
 串刺（くしし） 他人の田圃に杭を刺して妨害すること

右は稲作農耕への妨害行為であるが、左は人間生活と牧畜にかかわる清潔・衛生・安静を犯すという形で、危害を及ぼす行為である。

生刺（いきさし） 生きた動物を串に刺して家に投げ込むこと
 生剥（いきはぎ） 皮を剥いだ動物を家に投げ込むこと
 屎戸（くそへ） 人糞を撒き散らすこと

二、国津罪——葦原の中津国の一般住民たちによる罪行為、人間の身体を汚染し損傷すること、身体障害に生まれること、近親相姦・動物淫という性的タブーを犯すこと

生膚断（いきはだち） 生きている人の身体を傷つけること
 死膚断（しにはだち） 死人の身体を傷つけること

白人（しろひと） 白い膚の子に生まれること
 胡久美（こくみ） イボとかコブのある人のこと

己母犯罪（おのれのははおかすこと）
 己子犯罪（おのれのこをおかすこと）
 母与子犯罪（はがこをおかすこと）
 子与母犯罪（こがはをおかすこと）
 畜犯罪（けだものと性行為をおこなうこと）

昆虫乃災（むしのわざわい） 作物への虫の害
 高津神乃災（たかつかみのわざわい） かみなりによる災難
 高津鳥乃災（たかつとりのわざわい） 鳥の害

畜牧（ちくぼく）と蟲物為罪（まじもの） 家畜を殺して悪意の呪いをする

注意すべきは、「殺人」が項目になく、窃盗も特に挙げていないことである。また、国家の命令や義務への違反といった集団秩序の破壊なども触れられていない。そして、天津罪がより重大でより罪が重く、国津罪はより軽い、と単純にみなしてはならぬということである。また、身体障害や天災をも「罪」とし、天や

自然からの罰とみなすというのは、現代からすれば奇妙な感覚である。

こうした様々な罪を逆転すれば、罪なき状態、特にいのちの理想として、どのようなものが古代において善とされ、希願されてきたかが分かるのである。

右の罪の種類は、虎尾俊哉編『延喜式』上、集英社、一七九ページ、『国史大辞典』吉川弘文館、二九四―九五、八三五―三六ページによる。また、国学院大学編『神道事典』弘文堂、三七八ページには、「天津罪とはもともと雨の障り(つみ)から来ている」という折口信夫説が紹介されている。しかし、何も雨に限定することはないだろう。日本列島の文化と価値を「水稻作」と強く結び付け、限定し過ぎてはなるまい。

人類が何を罪とするかは、どうも、個人のというより、集団のいのちを存続発展させることを目的として、それを一切の価値の基準としているように思える。人類は「人のいのちは地球より重い」といいながら、国家による戦争では国民の一人ひとりのいのちを犠牲にする。国民全体のいのちがより重要だからである。

このことは、世界の刑法と民法とを集め、罪観念の構造を比較すれば確認できよう。具体的に何が罪とされるか、罪の重さの順番はどうか。これはおそらく、集団のいのちを支える上で決まってくる重要度ではないか。

日本の古典には、このように天津罪と国津罪との区別がある。これは天津神と国津神に対応する罪であるが、比較神話学の大林太良教授は、次のように述べている。

天津罪は、人間集団の中で、戦士的、あるいは支配者の機能ないし分子が生産者の機能ないし分子をおかした罪であった。それは、あくまでも人間のレヴェルにおける、人間文化の大枠を逸脱しない犯罪である。これに対して国津罪は、人間が人間のレヴェルから禽獣のレヴェルに墮落した罪、つまり近親相姦、獣姦や、食人をおかすことである。

(大林太良『日本神話の構造』弘文堂、六一ページ以下、ルビ追加)

日本の古典には、三種の神々(人々)が登場する。まず天津神であり、祭祀、政治支配、軍事などの働きを担う存在がいる。次に、国津神であって、支配される者、土地の王、生産に携わる人々である。さらに、諸々の自然神が存在する。自然界の山や川や物、動物、植物などの神々がそれである。

日本語で神(カミ)とは、ヒトと、動植物を含む自然物とからなり、プラス、マイナスともに秘めたる働きを有する存在を指していたわけである。

天津罪は、天津神が犯す罪であって、人類つまり天津神と国津神の生命的な働きを損害することであり、特に善の生産としてのいのちの聖なる働き――自然界と人類のいのちに働きかける生産の営み――を破壊し阻害するという罪である。

国津罪は、生産に携わる平の人間である国津神、つまり「国のうちの人民」が犯す罪であって、殺人もこのうちに含まれる。いのちの生物的活动及び社会的な秩序つまり人間関係を乱すことである。

表面的に理解すれば、古代人の罪意識は、現代われわれの罪感覚と随分違う。現代人たるわれわれにとって、自然には犯罪はない。天災あるのみ。しかし、古代人では天災や身体障害は、人間における罪に対する自然の神の怒りの現れとされたようである——この他に、祟りや穢れにも注目しなくてはならない。

殺人はいのちの破壊であり、罪の最たるものであり、田を毀すこと以上の罪であると思われるが、しかし、国家が出来た古代初期の時代では、そうではない。すべてのいのちの支えであり、社会の土台である「生産の働き」を破壊することの方が、より深刻な罪と考えられたのである。

実はこの点は、刑法で国家破壊の罪が最も重大視され、国防のためには兵士の個々のいのちさえ「犠牲」として投入する、という現代人の考え方と通じる。より大きないのちの保護は、より高い聖なる価値と考えられたのであろう。

現代でいえば、やがて地球環境の破壊が、個々の人間のいのちの破壊より、もっと重大視されるということになるのだろうか。この点は、忠誠心と犠牲というものについて、階層性、補完性の原理のところまで考えてみよう。

歴史は、神聖なる価値、したがってそれを破壊する罪と罰に関して、何が最高の基準かについて、人々の現代でいえば、やがて地球環境の破壊が、個々の人間のいのちの破壊より、もっと重大視されるということになるのだろうか。この点は、忠誠心と犠牲というものについて、階層性、補完性の原理のところまで考えてみよう。

歴史は、神聖なる価値、したがってそれを破壊する罪と罰に関して、何が最高の基準かについて、人々の

現代でいえば、やがて地球環境の破壊が、個々の人間のいのちの破壊より、もっと重大視されるということになるのだろうか。この点は、忠誠心と犠牲というものについて、階層性、補完性の原理のところまで考えてみよう。

歴史は、神聖なる価値、したがってそれを破壊する罪と罰に関して、何が最高の基準かについて、人々の

現代でいえば、やがて地球環境の破壊が、個々の人間のいのちの破壊より、もっと重大視されるということになるのだろうか。この点は、忠誠心と犠牲というものについて、階層性、補完性の原理のところまで考えてみよう。

歴史は、神聖なる価値、したがってそれを破壊する罪と罰に関して、何が最高の基準かについて、人々の

現代でいえば、やがて地球環境の破壊が、個々の人間のいのちの破壊より、もっと重大視されるということになるのだろうか。この点は、忠誠心と犠牲というものについて、階層性、補完性の原理のところまで考えてみよう。

歴史は、神聖なる価値、したがってそれを破壊する罪と罰に関して、何が最高の基準かについて、人々の

現代でいえば、やがて地球環境の破壊が、個々の人間のいのちの破壊より、もっと重大視されるということになるのだろうか。この点は、忠誠心と犠牲というものについて、階層性、補完性の原理のところまで考えてみよう。

歴史は、神聖なる価値、したがってそれを破壊する罪と罰に関して、何が最高の基準かについて、人々の

また、個人の人生では、楽しみも苦しみも、喜びも悲しみも、ともに素朴な味わいを帯びる。そういう情感の溢れるのが人生である。神話とは、集団のメンバーたる一人ひとりの個人のそのいのちの情感を、集団

の文化へと投影したものの、それが集団の無意識の層に蓄えられたもの、といえるのではないか。

故に、神話は、時によみがえって、私たち個人に感動と、安らぎと、癒しと、生きる元気を与え、励ましを与える。民族神話は、集団心理の表れであるが、同時に個人心理とも感応し、個人と集団との心を通わせるものなのである。

だから、共通の神話を持たぬ民族と国民は、弱体であり分裂しやすいのではないか。ゆえに、新しく建国し独立した国はすべからず、精神的に国を纏めるために、新しい神話物語——ナショナリズム、愛国心を創るのである。

(五) まつりごとの真の姿

俗に、個体発生は系統発生を繰り返す、といわれる。これは正確な見方ではないのだが、ともかく、人類においては、個体発生とは精子と結合した卵子が育ち、母親の腹の中で胎児として段々に大きくなり、ついにこの世に誕生することをいう。

そして、人間ではその行程が母親の体の中にある十ヶ月間である。その間に単純な下等生物から発生して高等生物となり、人類にまで到達するので、生物の系統発生の全行程を繰り返すといわれる。

私の提唱するいのち史観から見れば、個人の人生の行程には限りがあり、終わりがあって、必ず死という

ものが訪れるが、その子孫は続くことができる。国家も誕生から段々と成長し、子孫世代を重ねて続いていく。そこに、人生の誕生神話と国家の誕生神話というものがつながらるのであるのではないか。

それは、始源を語ることを基にして、連想と教育によるのである。神話の教育は、個人の魂の安定と元気のために、欠かすことはできない。

神話は、歴史に関するものだけではないが、「歴史の神話」とは、悠遠の古き時代についての記述である。その神話というものが、結局、人類の「いのちの歴史」の中で深い意味を物語る。その意味とはどんなものかを、ここで考えておきたい。

神話は、「心実」が色濃く混じり、物語の性質を帯びるから、その内容がかつて現実に起こり存在した事実かどうかだけを議論するのは、全くの筋違いというものである。現代人は事実信仰に毒されすぎているのかも知れない。古典たる記紀に述べられている物語が「どこまで事実か」というような、事実の詮索だけでは、神話が物語っている意味を尽くすことは絶対にできない。

まず、その時代の人々が、何をどのように「考えていたか」を、その記述を通じて明らかにすることが大切である。すなわち、神話の中に含まれる素実、真実、心実という「いのちの三実」を明らかにすることではないか。素実だけでも、真実だけでも、また心実だけでも不十分である。

神話は生じた「事実」(史実)に合わないから無意味だという類いの批判も、逆に書かれていることはすべて「事実」だ、という理解も、ともに神話というものについての無理解も甚だしい。素、真、心と三つ

ある実を一つの實だけに押し込めようとするからである。

現代神話学の先駆者、松村武雄先生（一八八三―一九六九）は、東西の神話を獵渉して、次のように語られる。

神話の語るところは、史的には事實そのままではないが、心理的には紛れもなく事實そのままである。神話は或る民族が或る時代に實際に行動した事象そのままの記録ではない。しかしその民族が或る時代に實際に思惟した事象そのままであるといふことには、一點の疑ひもない。……

某時代の某民族の思惟といふものは、單なる空想ではなくて、豊富な史的事實・社会的事實の上に立つてゐる。……

民族性・民族精神の關する限りに於ては、自分たちは、神話の告ぐところに強い信頼をかけることが出来る。

（松村武雄『民族性と神話』培風館、四三八―三九六ページ、ルビ追加）

難波田春夫先生（一九〇六―一九九二）は、「神話を愛するものも、ある意味では智を愛するものである」（アリストテレス）、智とは合理的、科学的な性質の智である、と説きはじめて、次のように興味深く神話の本質を語られる。

「神話」は、……單なる事實の歴史ではなく、事實のなかから拾ひ出された理想の歴史であり、民族の心のなかに永遠にとどまるものの歴史なのである。そのなかにはつねに、民族が永遠にそこがれゆく理念が残されてゐる。過去から取り出された未來がある。

「神話」は、かくして回顧的な過去であるとともに、翹望的な未來でもあり、したがつてこれら兩者をつなぐ永遠の姿でもある。それは、すべての時代がつねにそれに慕ひゆくが、しかもついに到達することのできない永遠のイデアである。……

おしなべて「神話」は、國家の起源を語るをつねとするが、その語るところは、必ずしも過去にあつた事實そのまゝではないであらう。とはいへそれは、なほあやまたず國家の起源を語る。たゞこゝに、いふ國家は、現實にかつてありし國家ではなくして、理念としての國家であるにすぎない。いひかへれば「神話」は、事實あつた國家の歴史ではなくとも、「型」としての國家の歴史を示してゐる。

（『國家と經濟』（戦前版）第二卷、日本評論社、三五―三六ページ、ルビ追加。）

日本の「古事記」、「日本書紀」における建國神話、肇國神話の最も根本的な課題は、日本において、天皇・皇室による國家統治をいかに正統づけるかにある。なぜ、その正統づけが、神々の現れと天地開闢から始まり、神々による国生み、天孫降臨、中津国での人皇の統治というつながりに於いて説かれるのか、という問題である。

従来、世界中で、治者の正統性を裏づけるのには、考え方に幾つかの類型がある。日本のものは、どの説であろうか。

(一) 王権神授説 全能の神が外から、この宇宙を造り人類社会を造られた。そして、その神が特定の人物に国家の統治者としての資格を認められた。しかも、その人物が有徳者かどうかは、人間の側からはなんとも言えず、まったく神のご判断次第である。ユダヤ・キリスト教の立場がこれである。イスラム教でも同様であり、預言者ムハンマドから続く血統を根本的に重視する。

(二) 有徳者易姓革命説 古代東アジア大陸の考え方だが、誰か統治者となるべき有徳者に天から「天命が下る」という説も、この型に属する。天の命令が変われば、統治者は交替しなければならぬ。大陸には、天の命を知るためには「民の声は天の声」である、といって現代の民主主義説に近い考えが存在した。近代欧米の民主主義論は、民衆の声のみが天の声もしくは神の意志を表すという説だといえるのである。

(三) 血統有徳者説 万物は、原始の神々の間における生殖行為によって自然に生まれた(生んだ)。統治者もそのようにして生まれ、その血統がその後の統治者の正統性を裏づける。

日本神話は、天皇・皇室が、日本国家の統治者として正統であるとする立場である。統治の正統派は天神の、特に天照大神の直系——女性神とすれば直系とは女系となるが、その後は男系原理とされる——の子孫であるというにある。もちろん、同時に、兄弟でありながらも、須佐之男命のほうは正統な統治者の

系列とは認められない。それは徳の差によるとされるので、高天原から追放された徳の低い須佐之男命とその血統——出雲系統——は、統治者の系列から排除される。

こうして、日本では、統治者の資格について、血統説を基にして有徳説が統合されたのである。現代日本は、日本国憲法・皇室典範においても、世襲——これまでは男系——の天皇をこの意味での統治者として位置づける伝統を受け継いでいるのである。ただ、現実の政治においては、近代日本では、立憲君主制であり、国民選挙で選ばれた議員から内閣を組織しているので、選挙制民主主義の考えを組み入れている。

(注) 平成時代の皇室典範改正問題

二〇〇五年現在、日本の皇室は、過去の一二五代に互り連綿と継承されて来た「男系の天皇」による天皇継承方式を改め、女系天皇を認めるかどうか、議論が起きている。このほど発表された「皇室典範に関する有識者会議」(小泉純一郎首相の私的諮問機関——何故「公的」なものにしないのか)の報告書によると、三つの重大点が述べられた(二〇〇五年十一月二十四日)。

- ① 女性天皇を認めること。
- ② さらに女系天皇を認めること。
- ③ 皇位継承者は、天皇または皇太子の第一子(長子)とすること。

これはあたかも女人禁制のところに女性が入ることを認め、男子禁制のところに男子を入れることを

承認するのに等しく、まことに重大な文化的変革である。もちろん、現行の日本国憲法——占領当局により即席に作られたもの——では、「天皇の地位は日本国民の総意に基づく」という趣旨になっているから、国民の意志を確認する総選挙により、実際には国会の議事を経て、どうするかを決めることになる。伝統性と選挙制との調和をいかに図るか、日本国家の最も根本的な原理が問われているのである。こういう歴史問題を、現在生きている国民世代のみの意志に基づいて決定してよいのかどうかは、深く問われるべき課題であるが、では他にどうすればよいかは難しい課題である。

顧みると、一九四五―四七年のマッカーサーによる戦後改革は、皇族の数を限定し、いずれは「皇統の継承に危機を孕むようにさせる」との密かな意図を込めたものであったが、その意図が露呈しつつ実現することになるのである。日本という国の「国体」（国の成り立ち）は根底から革命されることになる。

ただ、今の皇室に何故、こうも揃いもそろって男子がお生まれにならないのか、何故にであろうか。日本民族の生殖能力が全体として、生物学的に衰退しているのではないだろうか。鎌倉の源頼朝家でも、室町の足利尊氏家でも、徳川将軍家でも、すべて健康な将軍による継承がついに途切れた。

血統による継承制は、生殖能力に大いなる希望を寄せる制度である。それが維持できないということ、皇室という国民の核心的家族における生殖能力の危機なのである。それとも、人類史において、特定家族（群）での血統による継承という制度が、天命にそぐわぬ無理なものであるのだろうか。われ

われ国民各人の家族でも同様の課題が現われている。少子化問題がそれである。こうなるのも、神仏の思し召しなのであろうか。あるいは、科学的には、どう説明できるのだろうか。（注終、章末の追加参照）

政治システムとして考えれば、日本の天皇制は、形は似ているが、単に欧米的な個人主義・自由主義に立つ民主主義の仕組みを導入したというより、古代の天の岩戸籠もりで語られる天安河原での「八百万の神々の神集い」の理念が生きているものといえる。こういう見方を、われわれ日本人は、繰り返し繰り返し古典から学び直し、決して失ってはならないだろう。

明治維新は、鎌倉以来の武家の幕府による政治から、天皇親政へと復帰すること、つまり王政復古であったといわれる。しかし、天皇親政とは一体、何を意味するのか。それは、一人による完全な独裁政治を意味するのか。まさかそうではあるまい。古典の研究からその意味を取り出された難波田先生によると、親政とは次のようなものである。

天皇親政とは、「上御一人が政府の執り行ふ政事を親しく間看されること」を意味し、「具体的に政事を行ふもの」は、天皇に覆奏するという点において幕府と明確に区別せられるものの、やはり政府であるのである。

そして政府はあらゆる特定の社会的勢力の独占する所ではなく、「一党、一派の政治」たることはできない

歴史には、神話という心実が不可欠である

ものであった。(戦前版の『國家と經濟』第四卷、七〇ページ)

その根底において、天皇・皇室の瞬時も滞ることなき日々における任務は、「天神地祇に祈り宇宙の靈力に通うこと」であり、その「靈力を國民という人間集團の世界に導くこと」である。これが祈りである。祈りとは、お願いやお頼みではなく、神意のお伺いであり、それを受けて実行するという誓い(うけひ)である。

他の民族では、「はじめにことばありき」といわれるように、言葉というものに注目して、靈力を導くことを「神仏の言葉を預り伝達すること」つまり「預言」と名づけ、それを行う人物を特定の人物・預言者、あるいは中国古代の聖人、あるいはイエスの場合がそうであるように神人・現神と見做された。

日本では天皇は預言者に対応すべき存在なのであって、「はじめに祈りありき」なのである。天皇・皇室の根本任務はそこにある。「皇室外交」なども大切であるが、根本は皇統の連続化と祈りの実行にある。これは、特定の形の宗教の区別を超越したことであり、あるいは、特定の宗派に限定されないものである。

天皇の祈りと祭祀について、歴史を受け継ぐ現代の姿を簡潔に見てみよう。

天皇の一年は祭祀に明け祭祀に暮れると言っても過言ではない。大筋で一年の祭礼行事を記せば、次の通りである。

一月 一日 (元旦)
四方拜

元旦未明、午前五時三十分、天皇は神嘉殿中庭にお出ましになり、地面に敷かれた畳の上に平伏し、伊勢神宮、天神地祇、神武天皇陵、昭和

天皇陵、幾つかの神社を揺拝。
天津日継の大元の精神をご確認される祭り。

その年の五穀豊饒と産業経済の発展を祈る。

神武天皇はじめ歴代天皇、皇族方の御霊を祭る。

天皇ご自身・国家国民の罪汚れを祓う祭り。

三月二十三日 (春分の日)
春季皇靈祭

四月 三日 神武天皇祭

六月 三十日 節折・大祓

七月 三十日 明治天皇例祭

九月二十三日 (秋分の日)
秋季皇靈祭

十月 十七日 神嘗祭

十一月二十三日 新嘗祭

新穀物を伊勢神宮に奉獻、賢所に礼拝。

その年の新しい恵で拵えた神饌を神々に対し畳の上にて奉り、天皇自らも同じものを召し上がられる。

十二月三十一日 節折・大祓

毎月一、十一、二十一日 旬祭
 毎日 毎朝御代拝 侍従が宮中三殿に礼拝
 天皇は、一年間に六十回の祭りを行われる。
 特別の祭り 大嘗祭 新しい天皇の御即位の儀式

以上は現代、平成の御世での皇室の祭りであるが、その内容と形式は時代に応じて少しずつ変遷があるものの、まつりごとのために神の心を伺い、まつりごとの結果を神に報告し、また次の年の努めを誓うという本質は、古来より不変である、といえよう。

ここに、天皇親政の本質が秘められている。それは、目に見えない根本次元において、このような祭りを通して宇宙の霊力の導きと伝達を行い、祈りはそのための心事なのである、ということである。「天皇という個人が一切の政治の意志決定を取り仕切る」というような独裁政治——絶対専制——を意味するものではない。そのような独裁などは生身を持った有限の人間には不可能なことである。

仮に、独裁が親政であると考えて実行しようとした者があるとすれば、甚大な弊害を伴ったであろう——時にそのような誤解に基づいて現実政治に手を出した天皇や上皇、あるいは側近などが現れたが、それは日

本国家の歴史的伝統の正常態ではなかったといえよう。(笠原英彦『天皇親政』中公新書、一九九五年。明治初年の状況が知られる。)

天皇のなさる「まつりごと」とは、ご自分の個人的意志を述べ表すことではなく、祈りに基づいて、「しらす」(しろしめす) ことにあるのである。

故に、国民は天皇や皇族方のご人格について、誤解してはなるまい。天皇は、このまつりごとをなさる時には、個人・私人としての人格ではないし、権利義務の主体でもないのである。あくまで、存在するのは、国民の普遍意志を知ろうとなさるご人格であり、公としての人格だけなのである。輔弼の者、すなわち天皇のしろしめすご行為のために覆奏し補佐し申し上げる人々から、ご報告を受けられて、八百万の神々・国民の希望のありかを知り、天地の道のある所に沿って、ご裁可なさるご人格なのである。

現行の日本国憲法では、天皇の行為は、「国事行為」として列挙されたものだけに限定されるが、本来はそういうように決める理由はない。

そしてまた、国民の任務は、その天皇のご裁可に従って国家の目的を遂げることには仕え奉る、つまり「仕奉」することにある。(難波田春夫『國家と經濟』第四卷、六九―七〇ページ)

この親政の理念は、もちろん八世紀の古典に語られた理念と通い合うものであるが、プラトンの「理想国」における哲人政治や、孔子の聖人の治と同じように見える。選挙(コンクラーベ)によるという点では

異なるけれども、カトリックのバチカンにおける法王（教皇）の地位が思い起こされる。しかし、同じではない。

日本の古典においては、天皇・皇室は、歴史的に日本国民の「血縁的かつ精神的中心」として存在されるのである。天皇の存在は、お告げや占いにより、どこから発見され教育されて出来る哲人や生き仏といふようなものではない。あるいは、易姓革命論におけるように、天により徳を認められたと主張し、その武力により政權を奪うといふようなものでもない。もちろん、それらも各国なりの「國體」（こくたい）であらう。

しかも、日本の場合の天皇の存在は、ある時点の国民でなく、歴史的に永続する「代々の国民の系譜体」——血縁と精神との統一としての——が承認し支え一体化する「國體」なのである。この意味で、世界で唯一とは言えないが、間違いなく、現代の世界には稀有な在り方のものなのである。

だが、現実には、親政といふことは容易ではない。それは、代々の天皇ご自身が、不断の努力を重ねられることを通じて、そこに向けて進化なさるものである。

思い起こされるのは、明治憲法の時代のことであるが、昭和天皇のご反省があった。また、昭和天皇が若かりしころ、満州事変と関東軍の行動に関し、時の田中義一首相に厳しい叱責のお言葉を下されたといわれる。——それが因でか、否か、は不明であるが、恐懼した田中義一首相はほどなく急死した。一説に自殺との噂もあつた程である。

昭和天皇はその後、立憲君主として、ご自身の言行に、なお一層慎重になられたと聞く。

現在、日本国民は、歴史の今に立ち、至高最深の存在としての天皇といふものの在り方について、深く考へるべき時に差ししかかっているのではないか。憲法改正問題、皇室典範改正問題はそれにかかわっている。なにより天皇・皇室の「万世一系」であること、そのようにまた日本国民のいのも永遠不壊であるといふこと——そのことを天壤無窮、つまり天空と大地のように極まりなく無く永遠であるといふこと——を通じて、また人類全体のいのちが持続的に発展することが、日本国民の願いである。このいのち集団の万世不壊の実現のために、皇室は何を任務とされるものか、国民の任務は何か、今静かに思いを尽くすときではないだろうか。（後章の資料「大日本帝国憲法と日本国憲法の比較」参照。）

歴史には、神話という心実が不可欠である

（追記）天皇の価値への理解——天皇と現人神——

今日、「二君万民」とか、「天皇に忠誠を誓う」とか、「天皇を神と崇める」、などと言おうものなら、「戦前の古い倫理道徳を持ち出して強制するもの」と攻撃され、内面から発する倫理道徳ではないと決めつけられよう。そして殆どの言論機会から閉め出されるであらう。

ならば、同時代に支配したレーニンやスターリン、ヒトラー、あるいはその後の毛沢東などへの個人崇拜と前衛党支配は、どう意味付けられるのか。彼の諸国家も、その方たちの御真影を、国民に拝ませ、今もそうしているところがあるではないか。

もちろん、何事につけ、強制は好ましくない。国民の統合は、寛大な教育による自発性の誘発を基本とす

べきである。

かつての古い全体主義の苦い経験と、現代の価値基準からすれば、どんなものであれ、全体主義は出来ることなら避けたいものである。

日本でも、一九三〇から四〇年代の一時期、「総力戦体制」とともに、特高や思想取締当局などの中には、かなり多くの人たちが、天皇・朝廷の威を藉り、天皇を笠に着て——天皇の意に逆らってさえ——感情的で横暴な行為に走り、独善的なナシヨナリズムを振り回したが、それは深く反省すべきである。

しかし、二十世紀における戦争と革命にともなう全体主義の弊害は、何も日本だけではなかったのである。各国とも同様に反省すべきものである。

天皇への問いは、人類史全般に現れる重大な事実につながっている。神と人との関係の問題がそれである。つまり、人と神（仏）や天とのかわりである。

現神とは、次のような存在をいう。

① 神（仏でもよい）が人の姿を取ってこの世に現れたもの。

② あるいは偉大な人格者が神と同一視されたもの。

このどちらかの存在である。仏教では仏（ぶつ）であり、上人、聖人などというお方も同様であろう。キリスト教社会にいうセイント（saint、聖者、聖人）も同様。

このような「現神」を否定するのは、人類文化の現実を無視することである。この現実には、いろいろな文化に存在する観念の事実、つまり心実である。現神・現仏・生仏とは、何も日本にだけ残存する誤った観念などでは、決してないのである。

それを否認する見方は、文化的にも、宗教学的にも、さらに政治学的にも、偏狭ではないのか。一方で、欧米では、三位一体説によりイエスという方を神と一体——父なる神の子——と信じながら、日本やその他の文化の「現神」は、神——神のような品性を備え、この世・此岸に現れた人物——と認めない。それは、異文化を否定する信仰的独善ではないのか。

なお、ここで注目しておきたい点がある。すなわち、近年の新田均氏の丹念な文献研究に基づく新説についてである。それは、「現人神」（アラヒトガミ）、「現神」（ゲンシン）、あるいは「現御神」（アキツミカミ）という概念を危険な要素を孕んだ「幻想」である、という有力な天皇論であり、旧来の国家神道論への批判である。

これは貴重な研究ではある。すなわち、日本の明治維新このかた、あるときから不当にも、天皇は生身のまま「神である」とする幻想的な天皇論が出現し害毒を流したというのである。（新田均「現人神」「国家神道」という幻想」PHP研究所。これは狂信的国体論から距離を置いた、若い世代による冷静な文献的研究として、自己の歴史観を鍛える教材として、推奨したい。）

ただ、新田説とは別に、現人神といったものを批判する論者は以前から存在しており、その人たちによれ

ば、「その観念がひいては、大東亜戦争の敗戦へと日本国民を駆り立てたのだ」とする主張になるのであった。しかし、「天皇を現神（現人神）とするのは幻想である」という式の議論は、不完全ではないか。現神なるものを何と考えるかにより、幻想かどうかが決まるのであって、現神（アキツミカミ）とか現人神（アラヒトガミ）というだけで、排除されるべき見解であり幻想であると決めつけてはならない。ただし、神とか仏とかいうならば、現世において、そのすぐれた実を示さねばならぬ。

（注）現人神（アラヒトガミ、アキツミカミ）という観念及び存在は、英語でどう言い表せばよいか難題であるが、日本人の心情においては彼岸から此岸に語りかけ——精神的、物質的、生命的に——働きかける存在であり、それを人格的に観念したものであろう。東アジア大陸では聖人、天帝、天という言葉でイメージされた存在を人格的に観念したものである。ウァチカンの法王・教皇やカトリックで聖人に列せられた人々も、儒教にいう聖人、仏教の上人なども、聖なる存在であり、人格的にいえば現神（仏）であり現人神（生仏）であろう。絵画とか彫刻に登場する存在はそれである。山や川のようなものが神とされることもある。シルクロードの辺りではその事例に事欠かない。日本でもそうである。

偶像を一切求めないとするイスラム教では別である——もちろん、経典を音読する音やステンドグラスの色彩、建物などは認められるので、禁止される偶像とは神とか人物の絵や彫刻での像のみである。キリスト教では西のローマ系統でも東のイスタンブール系統（ロシア正教含む）でも、絵画やアイコンや彫刻を重視する。南アジアのヒンドゥー教ではいうまでもない。すべてそれらは、神仏が現存する姿と観念されるものなのである。（注終）

日本語で神という存在は、初めから、キリスト教等で前提となる「宇宙を創造した神」、あるいはその神の子や化身としてのイエスのような存在ではない。——それが実在するかどうかは信仰の問題である。その信仰が「唯一神」を信じない信仰より高等なものである、ともいえない。「天皇が神である」と考えた人たちでも、そうした唯一神であるなどとは思いもしなかったであろう。神仏のような方、というくらいの意味であつたらう。

もしも、天皇をそのように唯一神的な現御神と思う人があつたのなら、その議論は独善的、幻想的な観念論であり、一時期、いくら勢力を奮ったとはいえ、明治維新以来の、日本の「正統な国体論」の中の天皇の正しい理解ではあり得ず、天皇に名を藉り、天皇にあやかつた党派的、宗派的な観念に過ぎない。

問題の発信源は、過激な感情グループの存在であつた。つまり、天皇を高い人格者として神聖視するのはよいが、自分はそれを利用して国民を見下げ、「自分たちは高い国家観念をもっている国士なのであって、国民は自分たちのこの観念に従うべきである」という唯我独善の感情論を振り回し、過剰な言論弾圧や、軍の独走など、害毒を流した一派の人々である。

だが、天皇を重視した人たちが、すべてそのような独善論者であつたわけではない。そのような偏狭な感情論は本物の国体論ではなく、時局便乗的な感情イデオロギーに過ぎない。それは何より昭和天皇ご自

身が拒否された悪しき代物であつたらう。

人にもよるだろうが、冷静に実証的に理解すれば、「現神」とか「現人神」という觀念や言葉が、すべてそのように危険な幻想であつたとは言えない。

私が天皇論を重視するのは、そうした独善論とはまったく異なる意味においてである。天皇論において、幻想のものと、そうでないものとを、明確に区別せず、一切の天皇論は幻想であるかのように思い込み、棄て去ることになれば、日本国民は祖国の貴重な歴史的、文化的な精華を、屠ることになるのではないか。前に紹介した新田氏の研究は、心して読んで欲しい。

〔資料〕 天皇人間宣言（補遺一二詔 年頭、國運振興の詔書、昭和二十一年一月一日）

茲ニ新年ヲ迎フ。顧ミレバ明治天皇、明治ノ初國是トシテ五箇條ノ御誓文ヲ下シ給ヘリ。

曰ク、

- 一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ
- 一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ
- 一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス
- 一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
- 一、智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

睿智、公明正大、又何ヲカ加ヘン。朕ハ茲ニ誓ヲ新ニシテ國運ヲ開カント欲ス。須ラク此ノ御趣旨ニ則リ、舊來ノ陋習ヲ去リ、民意ヲ暢達シ、官民擧ゲテ平和主義ニ徹シ、教養豊カニ文化ヲ築キ、以テ民生ノ向上ヲ圖リ、新日本ヲ建設スベシ。

大도시ノ蒙リタル戦禍、罹災者ノ艱苦、産業ノ停顿、食料ノ不足、失業者増加ノ趨勢等ハ眞に心ヲ痛マシムルモノアリ。然リト雖モ、我國民ガ現在ノ試煉ニ直面シ、且徹頭徹尾文明ヲ平和ニ求ムルノ決意固ク、克ク其ノ結束ヲ全ウセバ、獨リ我國ノミナラズ全人類ノ爲ニ、輝カシキ前途ノ展開セラルルコトヲ疑ハズ。

夫レ家ヲ愛スル心ト國ヲ愛スル心トハ我國ニ於テ特ニ熱烈ナルヲ見ル。今ヤ實ニ此ノ心ヲ擴充シ、人類愛ノ完成ニ向ヒ、獻身的努力ヲ效スベキノ秋ナリ。惟フニ長キニ亘レル戦争ノ敗北ニ終リタル結果、我國民ハ動モスレバ焦躁ニ流レ、失意ノ淵ニ沈淪セントスルノ傾キアリ。詭激ノ風漸ク長シテ道義ノ念頗ル衰へ、爲ニ思想混亂ノ兆アルハ洵ニ深憂ニ堪ヘズ。

然レドモ朕ハ爾等國民ト共ニ在リ、常ニ利害ヲ同ジウシ休戚ヲ分タント欲ス。朕ト爾等國民トノ間ノ紐帶ハ、終始相互ノ信頼ト敬愛トニ依リテ結バレ、單ナル神話ト傳説トニ依リテ生ゼルモノニ非ズ。天皇

ヲ以テ現御神トシ、且日本國民ヲ以テ他ノ民族ニ優越セル民族ニシテ、延テ世界ヲ支配スベキ運命ヲ有ストノ架空ナル觀念ニ基クモノニモ非ズ。

朕ノ政府ハ國民ノ試煉ト苦難トヲ緩和セシメ、アラユル施策ト經營トニ萬全ノ方途ヲ講ズベシ。同時ニ朕ハ我國民ガ時艱ニ厭起シ、當面ノ困苦克服ノ爲ニ、又産業及文運振興ノ爲ニ勇往センコトヲ希ス。我國民ガ其ノ公民生活ニ於テ團結シ、相倚リ相扶ケ、寛容相許スノ氣風ヲ作興スルニ於テハ、能ク我至高ノ傳統ニ恥ヂザル眞價ヲ發揮スルニ至ラン。斯ノ如キハ實ニ我國民ガ人類ノ福祉ト向上トノ爲、絶大ナル貢獻ヲ爲ス所以ナルヲ疑ハザルナリ。

一年ノ計ハ年頭ニ在リ、朕ハ朕ノ信頼スル國民ガ朕ト其ノ心ヲ一ニシテ、自ラ奮ヒ、自ラ勵マシ、以テ此ノ大業ヲ成就センコトヲ庶幾フ。

(森清人編撰「みことり」、錦正社、平成七年、ゴチ、ルビ、句読点追加)

(注)ここは詳しく述べるべき場所ではないけれども、いわゆる「天皇の人間宣言」は、以下のような宗教学的精神から提案され、政治的に強制されたものであると言えるのではないであろうか。

①天皇が神であるというのは、ユダヤ・キリスト教の一神教の立場からすれば、許し難い僭越な考えである。神は唯一であり、宇宙を創造せられた「エホバ」のみである。

②百歩譲って、日本が、天皇は現人神・現御神であると主張し、イエスのような神の「化身」——神が人間の姿を取って人間社会に現われた存在——であるとしても、そういう現神は、神と三位一体の関係にあるイエス・キリストのみであり、そう主張する他の存在はすべて偽物なのである。なぜ偽物というのかは、議論が在り得るが、ともかく以上は純粋に宗教上の説である。

このような理解に立てば、天皇が神であるというようにイデオロギーを持ちつづけるならば、「裁判の被告席に座らせて天皇の戦争責任を問うべきだ」と力説する連合国側の先鋭な論者の乗るところとなろうから、そのような議論を躲すうえでも、「天皇は神でなく人間である」という事を宣言するほうが得策である、と。これは、日本人であり、天皇の意味を尊重し保持したいと考える人々の、戦略であったようである。もちろん、この人々もまたクリスチャンであり、天皇をイエスと同列の神の子と認めるなどは到底できないことであつたであらうが。

(注)日本における天皇論と民主主義論との論争には、政治哲学として重要な意味が含まれる。日本国民は、この点をもっと深く論議しなければならない。天皇親政は、独裁をいうものではない。理想的な天皇親政と理想的な民主主義とは、究極においては一致するものである。まず、民主主義では、必ず優れたリーダーというものを求める。これは国民から選ばれる議員が、選挙民の「代理」ではなく「代表」であるということの延長であり、代理と代表は異なり、代表は選挙民の意志を忠実に反映しなくともよいのであるが、一方代理は依頼主に対する弁護士がそうであるように、依頼主の意志を忠実に反映しなくてはならない。

歴史には、神話という心実が不可欠である

次に、民主主義の投票による決定では、選ぶべき目的が二つまでなら多数決方式でスムーズに決まるが、三つ以上になると決まらないことが起きる。そこで、「代表」という存在に決定を任せるといふことになる。その代表はかなり広い自由裁量の範囲をもち、その範囲の中では選挙民の意志を一々忠実に反映しなくともよいのである。代表とは、「ご自由に決定して下さいですよ」と、選挙民から (of the people) 決定を委託される存在なのである。むろん、その究極においては、選挙民の利益 (for the people) を実現することが求められる。究極は、天皇親政でも同様である。天皇はそのとき究極的な代表なのである。親政でも、民主主義と同じく、国民から正当に選ばれた議員と、官僚と、「政府」が、立法、行政、司法を行う (by the people)。イギリスをご覧あれ。(注終)

(二) 郷土と祖国の神話からプラス発想を学ぶ

冒頭に、神話物語は、民族に対して目的を示すものであると述べた。神話は、空想だと思いがちであるが、やはり一つの実なのであって、それは人々の心理的事実であり「心実」を表す物語なのである。ゆえに、ある国家民族を亡ぼすには、不可能な試みではあるが、その神話を破壊すること——精神的に——である。

和辻哲郎博士(一八八九—一九六〇)は、『古事記』を遺した古代大和の人々の心情について、次のように述べている。

彼らには、現世を悪として感ずる傾向はない。現世は不完全ではあるが、この世のほかには何があるだろうか。暗黒と醜怪とのよみの国。従って彼らが完全なるものとして憧憬するのは、この現世よりこの不完全を取りのぞいた常世の国である。死なき国である。それを彼らは、「地上のここでないところ」に空想した。すなわち彼らの憧憬は地上の或る異国への憧憬であって、天上への、彼岸への憧憬ではなかった。かくのごとく、「現世を否定せずして、しかもより高き完全な世界への憧憬を持つ」というところに、上代の理想主義がある。

(和辻哲郎『日本精神史研究』岩波文庫、四八ページ、ルビ追加。)

言うところの「地上のここでないところ」とは、天津国のことであろうか。天津国を列島の地と見るか。天上の国と地上の国と対比する二元的世界観から、目に見えない聖なる天上の国と見るか。いろいろな解釈が成り立とう。ゆえに、人がそうした天津国について完全な美しい物語を語りたがるのは、尤もなり、宣なるかな。

ここに、歴史教科書論争において争われるところの、教育における神話の位置づけに対し、一つのヒントがあるのではないか。物語は、それなりに妥当な思考である。そこで、それを現実と重ねるのはよい。現実と物語とを重ね合わせることは、当然なのである。

しかし、教育では物語自体を敢えて現実と置き換えてはならない。教育においてそうすることは、未来を

背負う子供たちを偽るようになるだろう。

ここに教育の要諦が浮かび上がる。子供たちには、素実と真実と心実（物語）という三実の間の区別と関連を一応教えておかねばならない。だが、その区別と関連を深く悟らせることを、餘りに焦ってはならぬ。物語は早くから教えるのがよい。あとは、子供たちの知徳が成長する過程に自然に任せて置けばよいのではないか。この微妙な任務を、教育というものは背負っているのではないか。親と教師の知恵が要るところである。

歴史は絵画や文学に似ていないこともない。歴史の基礎事実つまり素実は無限の相を帯び、不確定であり曖昧（ファジー）であって、物語としての創作の要素をふんだんに受け入れるからである。しかし、やはり歴史は絵画や文学——を要素として有するが——そのものではない。歴史は、芸術の要素を混じえながらも、「まるつきり芸術そのものである」ということはできない。

その際に、「心実」を表わす歴史物語（文学や哲学の形をとる）と、素実の記録である「真実」とを、安易に混同してはならない。

もとの社会主義諸国やお隣の韓国や中国もそうだが、ナショナルイズムが盛んな国で博物館や記念館を訪れると、往々にして自国の歴史物語をあたかも芸術のように華々しく描き、あまつさえ政治宣伝の厚化粧を加えたような構成になっているのに出合う。それは、「国造り」のための必要からであらうが、むしろ、

歴史というより政治文学や政治芸術の記念館である。

その点、日本は抑制の効いた国であるが、幾分、そうした類いの記念館がないこともない。各地の郷土史記念館を訪ねると、大体は考古学の発掘から出てきた遺物を静かに陳列してあるが、中には、単なる記録というより、全体が芸術や物語の意味合いを帯びたものも見受けられる。

歴史はまず、あくまでも素実をもとに真実を目指す知的営みでなくてはならない。

その土台の上に、「心実」としての物語が控え目に重ねられる。それなら、まことに自然な営みではないか。

心実としての物語は一概に否定はできない。ドイツ人のシュリーマンは「トロイの遺跡」をホメーロスの文学を手掛かりに発見した。

国家を統合するにも物語が必要なのである。ワシントンDCの議事堂周辺やモスクワの赤の広場、北京の天安門前の広場などの宏大な舞台装置は美事なものである。

人は、山や仏像や十字架などに手を合わせ、そして心を合わせるのである。

ガンディーも述べているように、人間は、心の中にイメージを造るため、きっかけとなるような何らかの像を必要とするのであろう。像も一つの記号であり言葉である。それが真理へとわれらの心を誘う。（マハトマ・ガンディー『私にとっての宗教』新評論）

それを偶像崇拜わうぞうすうばいといつて簡単に否定し去ることは誤りであろう。アラブ諸国でモスクの建物もそこから響ひびいてくる聖典を朗読する声も、偶どうとはいわないが像である。ヒンドゥー寺院の香かぐりも、キリスト教の大教会に備わるステンドグラスつきの建物も、すべて人間の心を刺激する情報発信の記号装置なのだ。すべて五感に響ひびき、そこを通らなくては情報は働かない。

絵や彫刻だけを偶像といつて排斥するのは、偏見ではないか。パーミヤンで行われた大仏彫刻への砲撃は、惜おししみても餘りあるのであった。

そこで、古今東西、歴史神話は感動の泉であるが、その感動という刺激を放射する神話には、民族の全体にかかわるような大きな神話——民族神話——だけでなく、小さな神話もある、ということにも目を向けよう。この「大きな民族の神話と、小さな個人の神話のつながり」については、内村鑑三「デンマルク国の話」(岩波文庫、「後世への最大遺物」と合本)を参照。

例えば、山口県の萩に行く、明治維新の立役者の多くを輩出した土地柄であつて、吉田松陰先生(一八三〇—一五九)の「松下村塾」が素朴な姿で保存されているが、展示は郷土長州の人々の愛郷の思いを込めたものであろう。鹿児島、高知にもある。そのような展示が、今日でも子供たちの心にいかに深く感動を与えることか、測り知れない。

松陰先生は、満二十九歳のとき、幕府の手にかかつて、小塚原にて刑死され、明治維新の直前(一八五

九年)にいのちを終えられた。あと十年も待つていれば、明治維新となり、世が改まり、新しい開化の時代が訪れていた、というのにである。惜おしみても餘りある。その人生は「未完成交響曲」であつた。しかし、そのことにより、先生はかえつて、はや一つの神話の主となられたのであつた。

親思ふこころにまさる親こころ

けふの音づれ何ときくらん

身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも

とどめおかまし大和魂

そしてまた、先生は、この世の活動を了えるにさいし、次のような考え方を示された。「種蒔く人」——『聖書』の言葉——の哲学と呼ぶことの出来るものである。

今茲五月、檻興國を去る、平生の心事具さに諸友に語り、復た遺缺なし。諸友蓋し吾が志を知らん、爲めに我れを哀しむなかれ。我れを哀しむは我れを知るに如かず。我れを知るは吾が志を張りて之れを大にするに如かざるなり。

(山口県教育会編纂『吉田松陰全集』第八卷、「諸友に語る書」、大和書房、四二〇ページ、ルビ追加。)

義卿三十、四時已に備はる、亦秀で亦實る。其の秕たると其の粟たると吾が知る所に非ず。若し同志の士其の微衷を憐れみ繼紹の人あらば、乃ち後來の種子未だ絶えず、自ら禾稼の有年に恥ぢざるなり。同志其れ是れを考思せよ。

(同書、第六卷、「留魂録」、大和書房、二九一―九二二ページ、ルビ追加。)

(私は三〇歳になった。人生として為すべきことはすでに為しおえた。春の草は育ち秋の実りを迎える。しかし、実りが秕(シイナ)となるか粟(アワ)となるかは、死んでいく私の知りえない所である。同じ志しを有する方々よ、私を哀れみて、その志しを受け継ぎ伸ばして行こうとされる方が居られるならば、わが死せる後にも私の志というのちの種子は途絶えることはなく、実りなきままに終わることはない。志を同じくする方々よ、わが心を推し量り汲み取られよ。――永安訳)

これについては、下程勇吉『吉田松陰の人間学的研究』(広池出版、五五一―五五三―五五六ページ)を参照されたい。

人は、この世から去る人生の最後に、どのような態度を表すかが大切なのである。

このような安心立命の境地を歴史の先人から学んでいる人と、学んでいない人とは、いざという人生の岐路において、実に大なる隔たりを生じるであろう。

私事で恐れ入るが、家庭で父が松陰先生、松陰先生と口癖に語り、また私自身、晩年の下程先生に――忠

実な受講者ではなかったけれども――親しく教えを賜る機会に恵まれた。恵みとは、真に真に、ありがたいことである。

郷土神話について、筆者の縁のあるところを挙げてみると、

古代の歌聖・柿本人麻呂

吉田松陰の萩

森鷗外林太郎(一八六二―一九二二)の故郷の津和野

古代神話の国の出雲

剣豪佐々木小次郎ゆかりの岩国・錦帯橋

三重苦を克服した聖女ヘレン・ケラーさん(一八八〇―一九六八)が降り立った岩国

それに加えて戦争(被害)と原爆のシンボル広島

それぞれ、感動の地となっている。これらはみな神話の発信源なのであり、単なる土地ではなく神話という物語を帯びた歴史的土地(historic land)なのである。

郷土というものは、よく調べてみると、身近に存在する歴史神話の宝庫である。冷静な心で評価し、感謝の心でもって保存し、大事にしたいものである。

栃木県で代議士の扁額に出合った。愛郷無限。(故・梶山静六さん)

(七) 本物の神話は、国民の靈力を自覚させ永遠のいのちへと導く

明治維新の直前、吉田松陰先生の主張の中心は、いずこにあったのだろうか。日本が、内部に小さな藩を分立させておく時代を了わり、藩を整理再編して一つの国家へと統合し、天皇・朝廷を中心として国家への国民の忠誠心を体系づけることである。それによって、国民自ら生命力を発揮し、予想される欧米列強の侵略に対抗すべきだということにあった。

これは当時、帝国主義の歴史の必然の見通しであって、先生がわずか二十九歳で幽明界を異にしても、後々まで、国民的教師として尊崇されるゆえんとなった。

松陰神話は、既に見た建国神話と比べれば小規模なものであるが、その国家統合の提言は、やはり建国神話にまでつながり、国民の本源的な生産力を発揮させる、という「神話の働きの核心」を、自らの生き方において表現するものであった。

生産力の発揮とは、日本の場合、次のものからなる徳と力のエネルギーを発揮することである。

- ① 天皇の祈りによる、宇宙自然の力、神仏の力つまり靈力の獲得
- ② それの国民への配分
- ③ 国民の側における生産力の発揮

同様のエネルギーは、日本のみならず、各国の歴史を解説する場合のカギではないか。

すべて民族の新たな危機においては、それぞれ新たな祈りと靈力が求められるのである。

神話というものは、国家のあれ個人であれ、大小いずれも、このような靈力の働き、国民の生命力とその発現の仕組みを、物語るものとはいえないか。

神話と現実とは対応関係にある。日本は、明治維新——一八六七年の大政奉還に始まる一連の国家改革——の前には、地理的にも精神的にも小さな藩に分立していたものだが、それでは立ち行かなくなり、それらを合体した一つの国家として力を結集し、中央集権の国家を造る必要に迫られていた。

そこで、当時もはや徳川將軍家の下で各藩に分かれた体制では、その必要な靈力を供給することが出来なくなり、再び古代の律令制による統一の時代が思い起こされ、天皇と朝廷——代々の長い歴史を一体としたもの——が注目されたのである。もちろん、広い範囲の人々を包み込み、人々を活性化する一段と強力な靈力の源として再構築されたのだが……。

日本史の授業で、「織田が搦ぎ、羽柴が捏し天下餅、座りて食らうは徳川家康」という歌を習った。

徳川家康は、その天才をもって、応仁の乱（二四六七〜七七）と戦国時代に捏られ始めた「天下餅」を搦ぎ上げ、平和な日本を造ったという次第。

その江戸体制も二百五十年の時が経って十九世紀半ばに到り、その天下餅だけでは、国民を食べさせることができなくなった。つまり、藩という小さな邦（くに）の纏まりを連合するだけの江戸幕藩体制では、用

をなきなくなつたのである。古い餅は固まり、部分的にカビが生えたので、「新しい天下餅」を搗き直さねばならなくなつたのである。

天皇の靈力れいりょくによる国民生産力——生きる力——というものを想い出し、国学こくがくという学問がくもんが復古ふくこし、培養ばいようし直すこと、これが、国内における王政復古おうせいふくこと維新いしんの真の理由であり、国民の期待でもあった。

日本の王政復古おうせいふくこには、また同時にもう一つ外部から来る理由もあった。つまり、アメリカ、オランダ、イギリス、フランス、それに北方のロシアなど欧米列強ちゆうべいれきやうは自国の靈力——白人キリスト教とヒューマニズムと科学技術が生み出す結合生産力——に基づく産業・工業力と武力をもって、地球上各地に植民地支配を拡大しつつあった。それが帝国主義ていこくしゆぎというものであった。

日本も、それに対抗するほかなかつた。靈力を再開発し、国家を統合して植民地支配をはねつけるだけの力を養やしなひ、富国強兵ふこくきやうへいの実をあげ、外国の攻撃に対抗する力を生み出さねばならなかつた。明治の模倣もぼうを戒め独創どくちゆうを図るといったスローガンは、この求めに応じる趣旨しゆしを言い表した。

隣の清国はそういう国家としての統合と靈力を欠いていたのであった。他山の石たざんいしであった。——しかし、十八世紀中頃の清国は弱体一方ではなく、長江近くちやうきやうの狭い領域であり、その後、内モンゴル、南西地方、チベット、故地こちである満州地域へと版図はんとを拡大、大帝国となる。中華民国、共産中国はその帝国の継承者けいしやうしやである。

二十一世紀初頭、今また我が国は、グローバル時代に生きて行くために、新たな靈力を開発し發揮し直さなくてはならない。

天皇と政府——昔風にいえば皇室と朝廷——は、そして国民も、共に神に祈り、祭りごとを行って、この新たな危機を乗り越える靈力を開発しなくてはならない。今日の人々の信仰や祈りや祭祀は、商売が繁盛しますように、大学に合格しますように、などと自分の私的利益を神仏しんぶつにお願いするものだけになり下つているのである。

現今の政治体制と政府は、そのように新たに拡大し深化する国民のニーズを充たすことができるかどうか、問われるのではないか。また、国民自身も、自己の靈力を開発し直さねばならないのである。

英国が、拡大したEUのメンバーとして加盟かみんすることはしたが、通貨までEU化するかどうか、二十一世紀初めに当たり決めかねたが、これは一つの危機を表しているのではないか。すなわち、英国王室とその政府に、国民の求めに応じるだけの靈力を供給する徳が備わっているかどうか問われているのである。

一九九〇年代のジャーナリズムをずっと賑わした英国王室におけるチャールズとダイアナという皇太子ご夫妻の惨めなスキャンダルは、英国の行末ゆくすゑを占うかのようだ。

いずこの国でも、いつでも、国家改革の根源には、このような靈力をめぐる祭と政との相互作用が潜ひそんでいるのではないか。今日、簡単に政教せいぎょう（治教）分離ぶんりといって済すますが、それでよいか。

神話というものは、常に新しく学び直し教え直さなければ伝わらず、教えなければ人心から消え去っていく。われわれは、まず、身近な親祖先を語る家族神話から始まって、郷土神話の語り部とならねばならない。これが後生への務めである。それによって、われわれは、先人からのちを頂いたのであるから、次の世代へとのちを伝えるという務めを果たしたい。

ここに、忠誠心の問題が浮かび上る。それは、グローバル時代にわれわれ国民が一人ひとり、志をどこに向けて発揮し自己を統合し自己を実現するか、何に人生をかけるか、というアイデンティティの問題に直結する。

その点で今、冷静に検討してみるべき課題が蘇りつつある。すなわち、二十世紀後半、一世を風靡したいわゆる「丸山政治学」をどう評価するかである。

東大の丸山眞男教授（一九一四―一九六）といえ、「時代を映す人」（作田壯二）の一人であった。大東亜戦争中、国体明徴講座の一つとして「日本政治思想史」を講じた。

敗戦の後、進歩的文化人として、東大法学部に拠点を置き、欧米の共和制を暗黙の理想とし価値判断の基準としながら、マルクス主義の風潮をも利用しつつ、近代日本の思想と現実を解剖し、日本が欧米の標準からどれだけ離れているかを明かにし、「離れているところは否定すべき後進性」と判定した。

教授はマルキストではないが、いわゆる今日、ある派の人たちが批判する「自虐史観」の一部——当時は市民派的で最も先進的な史観とされたもの——の形成にも、多大の貢献を行った方の一人であることは否めないだろう。

丸山教授によると、封建時代の吉田松陰の精神の中には、末期であるがゆえに、根本的な矛盾が含まれていた。自分は「毛利家の臣なり」という藩大名への忠誠と、「毛利家は天子の臣なり」という天皇——徳川将軍家ではない——への忠誠のつながりだが、「一つの魂のなかで闘ぎ合っていて、その苦惱をよく示している。」そして、武士の忠誠は、大名たる毛利家どまりで、将軍家——ましてや天皇——にまで達する忠誠ではなかったらう、といわれる。

確かに、江戸時代に限らず、それ以前にも平安時代末期、父の平清盛に対する子の平重盛の対立このかた、朝廷と幕府を巡って、日本の倫理道徳は矛盾を生じる可能性を秘めていた。

「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず」という平重盛が苦惱した矛盾がそれであり、親への孝行と天皇への忠誠とが両立しないという事態であった。この点は、丸山眞男『忠誠と反逆』ちくま文芸文庫、四一ページを参照。

しかし、丸山教授は、一九六〇―七〇年代初めの東京大学紛争の中で、学生から批判を浴びるようになり、研究室を土足で踏み荒らされ、急速に「落ちた権威」「壊れた偶像」と評されるように変わった。丸山教授は、一九六七年、こう述懐し、嘆息したと伝えられる。

「何をしたらいいか、自分でもわからなくなった」と。（『丸山眞男講義録』東大出版会、一九九八年、第

四冊（一九六四年度）、一四一ページ。）

ただ、教授の業績は決して全面的に否定し去るべきものではない、と私は思う。鹽の水は流してもよいが、赤子までも流してはいけない。学生として渦中に居た者の一人として、そのように反省している。

世論上では、人物の評価というものは、ジャーナリズムが加わることによって短時日の間に極端から極端へと揺れ動くもの。しかし、そのような揺れは必ずしも信用の置けるものではないのであって、長い目で見なければならぬのである。（長谷川弘『丸山眞男をどう読むか』講談社現代新書、は有益。）

さらに付言しておきたい。丸山教授は、右に述べた通り、一九六〇年代、学生運動家たちによって一時、「落ちた偶像」と批判されたというものの、以下のように古代の『記紀』における日本神話について語り、注目すべき洞察を示していたのである。

従来、日本の学者は「日本の特殊性ばかり」強調する傾向がある、しかし日本の神話の構成要素は「日本に特有で、ほかにないというようなものほとんどありません」（加藤周一ほか編『日本文化のかくれた形』岩波書店、一二六ページ）

「一方において高天原（天上）——葦原中国（地上）日本国——根国（地下）という宇宙の垂直的構造と、他方においては仏教の西方浄土観念とも結びつく蓬萊国、または出雲に想定されている黄泉国と葦原中国との関係のような世界の水平的な構造とが、日本神話の中で競合している、ということです。」

（同前書、一二七ページ、ルビ追加。）

「その個々の要素がある仕方で相互に結びあわされて一つの『ゲシュタルト』——全体としての、日本神話の構造をなしている点に着目すると、それはきわめて個性的なものです。天地創造と一定の領域をもった国土の生産と、現在の最高統治者の先祖（天皇——引用者）の生産と、この三者が一つづきになっ

ていて、しかもその三者が時間的・歴史的系列のなかで展開して行くという構造は、世界の数ある『神話』のなかでもきわめてユニークなものです。」（同前書、一二八ページ、ルビ追加。）

この生産生成は、次の局面からなる。

- ① 天地の生産
- ② 国土の生産
- ③ 統治者の生産
- ④ 国民の生産
- ⑤ 統合された国民国家の生産

この日本神話も、人類社会における総合的な生成の神話の一つなのである。

右の文中、丸山教授が、「最高」という言葉を書きつつも、強調傍点を振っていないのは、何か「いわく」ありげであり、あるのであろう。

日本神話においては、垂直的な構造のものは北方のウラル・アルタイ系統、海の彼方から幸が音連れるという水平的構造は南方系統のものとされる。これは神話学で周知の通りだが、その組み合わせの全体に、日本神話の個性が現れているというわけであろう。日本列島の地理的、風土的特性を思わせるものがある。神話という人類の心実、自然環境から完全に無縁ではありえない。

神話は、ユダヤ・キリスト教、そしてイスラム教系統のそれだけが唯一正統で一貫性をもつと言うものではなく、地球上の古い歴史を経たものは、すべて存在価値が見出されるのではないか。

戦前（一九四五年以前）からの議論を基に、この丸山説は、現代日本の国のあり方を考察する上で、活用の仕方さえ誤らねば、決して忘却してはならぬ論点を含む。大東亜戦争中、知識人はいのちを懸けて真剣な思索を行い、立場のいかんを問わず、「単なる時局迎合ではない真実」を秘めていたのである。

丸山教授はまた、「なる」「つくる」「うむ」「むすぶ」という生成の観念を基にした、日本の古典における「特異」の生命力的な神話体系に潜む論理を検討し、興味深い議論を示し、「原型・古層・執拗低音」という見方を示しておられる。

われわれはこれに、「まつり」、「みそぎ」、「はらい」、「しろしめす」、「きこしめす」、「仕え奉る」という政治心理的な物語の働きを加えるべきだと考える。このような点は、古典における神話の読み直しにおいて、大切な分野であろう。

（注）日本古典における宇宙観（コスモロジー）は超現代性を持つ

日本古典に於ける神話は、けっして空想でもなく荒唐無稽なものでもない。また、天皇・皇室という治者の正統化——それも不可欠のテーマである——のみを意図するものではない。初めの（一）で述べたところと関連づければ、次のように「天地人」の宇宙と、「因果律の観念」、「善と悪」、「罪と罰」、「人類の天命への悟り」というものを包摂している。それは、おめでたい現代的な一元論を超えるものである。

一、天地（天と壤）は窮まりなく——旧約のような被造説でなく——自己自身で自己を産出し創造する「自己創成的なもの」（autopoietic being）である。「なる」「うむ」「次に」という言葉は、そのことの観念的表現、言語的表現である。丸山眞男教授はそのことを指摘したのであった。それは、荻生徂徠の哲学を学んだ教授が、「自然と人工」「じねんとさくい」という対立軸で世界観を構築したところと深く繋がっている。

記紀の物語は、天道と人道とについて、両者を野放図に同一視する鈍感な哲学者と違い、安易に同一視しなかった二宮尊徳の鋭い認識と共通する。（『二宮翁夜話』を参照。）

二、ゆえに、天地の間に生まれた人類（人）は、鬼子のように「罪を犯す」・「悪（コスモスの破戒）を生み出す」という性質を生まれつき秘めている。原罪ともいべきか。もちろん、善を生み出す性質も

秘めている。アマテラスは、機織りのように「生産的な仕事」を行い、スサノオは、中津国に天降ってそこを「開拓」したのであった。

罪と罰（スサノオの追放）の物語が明白に語られている。スサノオの罪の行為とは天津国で「人工を天然に返す破戒の行為」であった。

この天然と人為の間の矛盾的関係にこそ人類の宿命（地球環境問題）のゆえんが存する。単純な自然と人工の調和論ではないのであった。

三、しかし、自然と人間でなく、人と人との間の関係としては、アマテラスが、スサノオの乱行を、受け入れ、寛大な心で許し、自己反省するという道徳的行為の物語を含む。

さらに、国家の建設（国産み）と支配（政治）では、祭祀を通じた「シラス」という「じねん」を根底とし理想とする——ヤマトタケルに見られることく——もちろん武を否定しない。武とは戈（ほこ）を止（と）め平和へと到る営みであるが、記紀の物語はおめでたい仁政・王道論だけに立つものではない。引用した『聖書』の物語も、いうまでもない。平時の日本武士道を体係づけた兵学者・山鹿素行は、聖人の真説ではないと単純な唯仁政論を批判している。人は、記紀神話を評価するについて、しばしば「平和主義」を力説するけれども、それは一方の「戦後的平和主義」というものに対する引け目からではないのか。我々は古典を読むにおいては、平和主義を含みつつも止むを得ず必要悪として、武をも見逃さない「事実主義」でなくてはならないだろう。

実は、吉田松陰に見る忠誠の構造における矛盾は、東アジアでは儒教倫理の内部矛盾として、大陸に興亡した諸国家にも、朝鮮半島にも、しばしば現れていた。

朴政権時代、対日経済特使を務められた韓国の優れた知日家——「親日家」ではない——韓準石先生の『文の文化と武の文化』（有斐閣）には、朝鮮半島の社会では孝（家族内モラル）が忠（国家的モラル）より優先された、という事実に関する興味深い記述がある。（四六ページ以下）

否、キリスト教国家でも、矛盾は幾度も形を変えて現れた。この矛盾は、個人と共同体の関係には付き物の忠誠の矛盾である。家族のような共同体の中で個人をどこまで追求するかの問題だからである。（アマタ・エチオーニ『新しい黄金律』麗澤大学出版会。これは共同体と個人との関係についての卓越した研究書である。）

忠誠心の確立は、人生を左右する問題である。心というか、魂というか、精神というか、そこに内部矛盾を孕むときには、人は自分の生命力を一つの明確な人生目標に向けて統合し集中し発揮することができる。

そういう内部矛盾をかかえた人々を集めたような国民に基礎をおく国家は、生命力が分裂し外国との競争に後れを取る。そういう分裂に起因する弱さが最も深刻に現れるのは、国防・軍事と外交の局面である。

日本では、政府が相手国と交渉している外交問題で、その相手国に詣でて相手国政府やマスコミに媚び、自国政府の足を引っ張り、利敵行為に走る政治家たちが必ず現れる。北方領土返還交渉における、対中国

対韓国、対北朝鮮等との外交における、日本側の分裂した対応を見られよ。日本外交とは、足もとを見ずかされることの連続であった。

今、グローバル時代となり、企業などは、背に腹は代えられず自己の生存を懸け、生き延びるためか、「国内の空洞化なんて知ったことか」とばかりに、後足で砂を蹴って海外へと靡いている。これは企業が有り餘る力を持って、相手国を支援するせいなのか。そうではなく、自己保存の為に、「闇雲」に行動しているだけであるのか。企業は、企業益のみを目指し、国益など視野の外に捨てているのか。そもそも国益とは何か。われわれは何に忠誠を向けるべきか、明治維新の方も一度、新しい忠誠の仕組みと体系を構築し直さねばならない時代に、日本は入りつつあるのではないか。

グローバル化は、忠誠の対象と方法を拡散させ分裂させる。しかし、他に向かうところはないから、かえって対象は自己自身へと、方法は自己中心主義へと向かい、徹底した無国籍個人主義（コスモポリタニズム）を地球規模で普及させるのではないか。

一つの方向としては、十八世紀以来の古い自由主義の哲学、「見えざる手による予定調和」の哲学に賭ける行き方となる。一切を個人と個々の団体や会社の自己利益の追求に任せ、各々が自己の利益を達成すれば、そのことがおのずから国家社会全員の福利につながる、というわけだ。

自由主義にもいろいろあるが、この種の自由主義はアメリカが——建前として——最もよく実行している

ものである。実行しているからこそ、アメリカン・スタンダードが直ちにグローバル・スタンダードであつてよいのか、という批判を生むゆえんでもある。グローバル時代の忠誠心、従ってアイデンティティについては、後章を参照して頂きたい。

(注) 日本の天皇・皇室には「万世一系」という理念の物語が存在し、建国物語の出発点になつていて、それは次の柱からなる。①天皇は、天津神・天照大神の血統を継承する子孫であり、「天壤無窮」に存続して豊葦原の中津国を「しろしめす」ご存在である。②皇位継承において、その子孫たる天皇は、現在の天皇の直系でなくとも、神武天皇から途切れることなく続く「男子の系統」でなければならぬ。③時にはやむを得ず「女性天皇」が認められるが、「女系天皇」は認められない。

こういう継承方式が代々受け継がれて来た。これは「平成十七年までの皇室典範」の原理であるが、この③の点について、法律たる皇室典範の改正が日程に上っている。ここには「血統の質」の問題が存在するのである。

万世一系といつても、一本の綱のように、一本の生命が続くのではなく、いわば株のように幾つもの生命の綱が連携して存在するという意味であり、それぞれの綱が神武天皇という元の根っこを一つとし、そこから枝分かれし、そのうちの一つの枝が枯れる（男系の枯渇）と、遡って同じ根っこから生じて続いている他の命の綱の系統（皇族）における子孫が皇位を受け継ぐというものである。万世一系とは「生命の株」の存続継承なのである。（注終）

各国とも、王となる者、あるいは大統領、首相、国家元首となる者については、信じる宗教の種類、性別、徳性、国民としての経緯などにおいて、さまざまな不文律^{ふぶんりつ}あるいは成文律^{せいぶんりつ}が共有されている。『旧約聖書』には、アダムとイヴからその系統を受け継ぐ血統がイエスにまで辿^{たど}られるという系譜^{けいぶ}物語^{ものがたり}が収められている。パチカン国の法王・教皇となる人は、プロテスタントの信者でも、イスラム教の信者でも、そのほかカトリック以外の宗派の信者でも、すべていけないであろう。イスラム教国ではムハンマド以来の血統の系譜が尊重されるし、イスラム教徒以外の人は国王、大統領や、首相、国家元首にはなれない。また、共産党政権の支配する国家（一つの政治文化体）の元首には、共産党党员以外の人はなることはできないだろう。

これが文化・国家統合の物語の違いというものの本質なのであり、そこにその文化独自のものの以外、他から導入した善悪の基準は入り込めない。文化・神話・物語の多様性は、こういふところにも現れる。

日本の皇位継承の原理に、近代西洋の「男女平等というような人権論」などからの基準を導入することは、日本の伝統を断絶^{だんぜつ}させることになろう。「それも善^よし」とするならば、それは古来の伝統の破壊であり革命であることを承認するものである。日本皇族と、日本民族・国民は、身を清めこころを沈着^{しんせき}にして、このさい篤^{とく}と敬慮^{けいりょ}を巡^{めぐ}らすべきなのである。(二〇〇五・十一・十)

*例によって若干ルビを加えました。コンピュータワークについて、栗山聡美・古川範和・栗原絢子氏の協力を得ました。記して感謝します。